

坑で、23基検出されており、石が出土していない土坑の約半分にすぎない。ところが、b・cに属する深さが50cm以上の土坑では、石が出土している土坑は62基で、石が出土していない土坑とほぼ同数である。土坑の底面から出土する石は、鎮魂の意味をもつものと思われており、これらの石が出土している土坑は、人を埋葬したものと考えられる。また、石が出土しない土坑の中にも墓壙は存在するものと考えられるが、一応ここでは、底面から石が出土している土坑は墓壙として使用されたものと考えられる。

B類

B類は、いわゆる円筒形状の土坑である。その数は78基で全体の23%である。その中でII c(長径が1m以上2m未満で、深さが1m以上)は28基でB類の36%，II b(同じく深さが50cm以上1m未満)は26基で33%，II bとII cでB類の69%を占めている。また、B類の中では深さが50cm未満の土坑はII aの3基で4%にすぎず、円筒形状の土坑はほとんどが50cm以上の深さを有している。分布状況は、調査区西側と、中央部の南側、東側に集中して検出され、中央部から北側にかけては数基が散在しているにすぎない。遺物は、後期の称名寺式、堀之内式、加曾利B式期の土器が主に覆土から出土している。また、底面から石を出土している土坑は、46基でB類全

表34 土坑形態別集計表

平 面 形 態 別	底 部 所 在 地	A		B		C		D		E		小計		合 計	
		底 部 に 石 あり	石 なし												
I	a	2	11									1	2	12	14
	b	5	15	4	11	1				2	2	12	28	40	
	c		1	1	3							1	4	5	
	小計	7	27	5	14	1				2	3	15	44	59	
II	a	19	37	1	2				1		4	20	44	64	
	b	43	43	18	8	18	3			5	7	84	61	145	
	c	6	1	21	7	7	1				2	34	11	45	
	小計	68	81	40	17	25	4		1	5	13	138	116	254	
III	a	2	3					1	1		1	3	5	8	
	b	7	3			1				4	2	12	5	17	
	c	1		1	1	2				1		5	1	6	
	小計	10	6	1	1	3		1	1	5	3	20	11	31	
合 計		85	114	46	32	29	4	1	2	12	19	173	171	344	
		199		78		33		3		31		344			

体の59%を占めている。特にB IIに属する土坑57基のうち、石を出土している土坑は40基で70%を占めている。石を出土している土坑の覆土は、ほとんどが、掘削後すぐ埋め戻された状態の土層堆積を呈しており、覆土の分析の結果、リン・カルシウムが特に多量に検出されていることからも、本類の土坑の多くは、墓壙と考えてよいのではないだろうか。

C類

C類は、いわゆる袋状（フラスコ状）土坑である。その数は33基で全体の約10%である。その中で、II b（長径が1m以上2m未満で、深さが50cm以上1m未満）が21基で本類の64%，II c（同じく深さが1m以上）が8基で24%で、II bとII cでC類の88%を占めている。分布状況は、

土 坑 形態 分 類		A			B			C			D	
		III a	III c	II a	II b	II c	III a	III b	III c	II a	II b	II c
A	I c	a	b		a					c	a	b
B	I	b	c	a		b				c		c
C	I	b			b			c		b	c	
E	I	a	b	a		b		c	a	b	c	

第264図 土坑形態分類・形態別分類

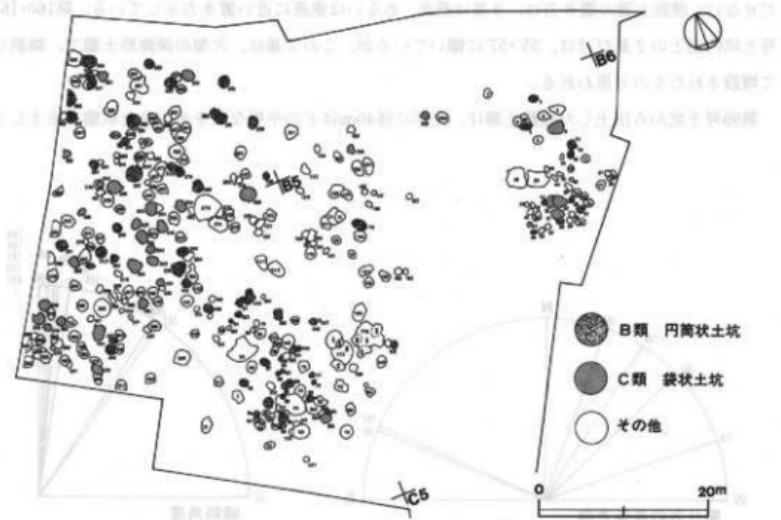
調査区西側に集中して検出され、中央部から東側にかけては、数基が散在して検出されているだけである。また、33基のうち、底面から石を出土している土坑は29基で88%を占め、石を出土していない土坑はわずかに4基である。遺物は、A類、B類と同様に覆土から出土しているが、本類以外の土坑に比較して少量である。また、覆土の分析の結果、B類と同様の結果が出ていることから、本類の土坑の大部分は、B類と同じように墓壙として使用されたものと考えられる。

D類

D類は、平面形が方形、長方形の土坑である。数は3基で、1%にも満たない。いずれも壁は垂直ぎみに立ち上がり、底面は平坦である。規模は、長径が3m近いものが2基、1.4mのものが1基で、遺跡東部にまとめて検出されている。覆土はほとんど黒褐色で、遺物は、覆土上層から少量出土しているが、土坑底面からの石の出土はみられず時期や性格的なことは不明である。

E類

E類は平面形が不定形の土坑である。その数は31基で、全体の9%を占めている。壁は外傾して立ち上がり、底面は凹凸状を呈しているものが多い。深さ50cm以上、1m未満のbに属するも



第265図 土坑形態別分布図

のが22基でE類の70%を占めている。分布状況は遺跡全体に散在しており、規則性はない。また、底面から石を出土している土坑は12基で、出土していない土坑は19基である。石を出土している土坑はいずれも深さ1m以上のb・cに属する土坑であり、覆土もB・C類と同じ堆積状態を示しており墓壙と考えられる。

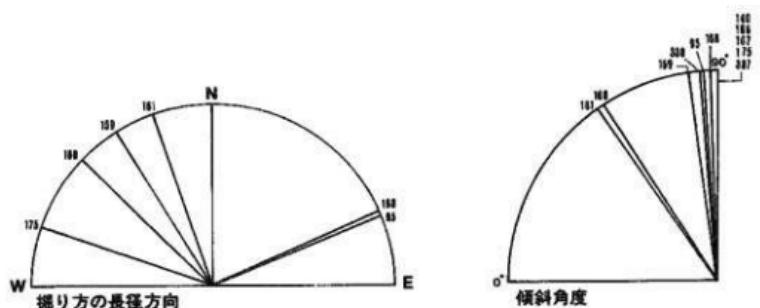
4 埋壁構造について

当遺跡において検出された埋甕遺構は11基である。11基の内、7基は調査区中央部の住居跡が多数検出されている地域に、4基は調査区西側に検出された。

使用されている埋設土器は、深鉢形土器の一部が欠けたものがほとんどである。すなわち、口縁部が欠けて胴部と底部だけのものや、底部が欠けて口縁部と胴部だけのものなどである。完形の土器を使用したものは、第166・337号土坑から出土した土器だけである。また、第140・166号土坑から出土した土器は、口縁部を下にし、伏せた状態で埋設されており、第140号土坑出土の土器は、底部が欠け、第166号土坑出土の土器は、底部に孔が穿たれていた。時期的にみると、中期後葉の加曾利E III式の時期のものが2基、後期前葉の称名寺式、堀之内式の時期のものが4基、中葉の加曾利B II式の時期のものが2基、晚期前葉の大洞B式の時期のものが2基、時期不明が1基である。

掘り方の長径方向は、第266図からみて、北西方向と東方向に散らばり、規則性はとくにない。埋設土器の置き方は、9基は垂直、あるいは垂直に近い置き方をしている。第160・161号土坑内出土の2基だけは、55°・57°に傾いているが、この2基は、大型の深鉢形土器で、傾斜して埋設されたものと思われる。

第95号土坑から出土した埋設土器は、上部に径40cmほどの平坦な石をかぶせた状態で出土して



第266図 埋葬遺構の掘り方の最深方向と埋設土器の傾斜角度

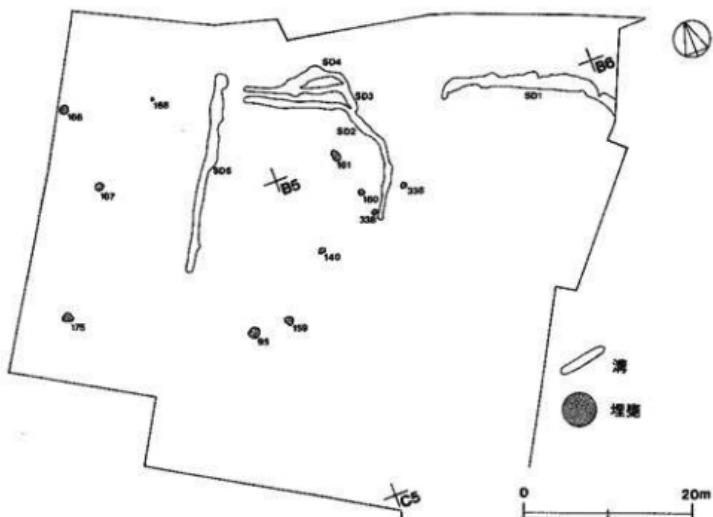
おり、当遺跡の中でも特異な埋甕遺構と考えられる。

分布状況からみると、埋設する場合に一定の規則性を有していたと考えられる資料は得られなかったが、多数検出された中央部は、東側が一段低くなる手前の台地先端部であることから、一定区域に埋設するという習慣があったものと考えられる。

5 溝について

当遺跡からは、溝が5条検出されているが、位置関係をみると、第1号溝は北東側の緩やかな傾斜地に、第2～4号溝は中央部北側の傾斜地に、第5号溝は西側に位置している。主軸方向で大別すると、第1～4号溝は北西から南東方向、第5号溝は北東方向から南西方向に延びている。規模は、一番短い4号溝が8m、最長の2号溝が27mである。ただ1号溝は、東側の調査区域外へ延びており、全長は不明である。幅は上幅でみると、1号溝が1m以上あり、2～5号溝は1m未溝である。深さは、1号溝が30～56cm、2～5号溝は10～28cmである。また、溝の両端における底面の高低差をみると、5号溝は78cm、3・4号溝は45cm、1・2号溝は9～12cmである。

出土遺物からみると、各溝の上層には、土器捨場として調査をした遺物包含層があり、後期の



第267図 埋甕・溝分布図

土器片が多量に出土している。各溝の覆土からは、縄文時代後期の称名寺式、壠之内式、加曾利B式、安行I・II式期の土器片が出土している。さらに、溝の上部には、一部に後期後葉の配石遺構が検出されていることから、各溝の構築された時期は、後期後半ごろであると推定される。また、溝の性格については、明確にすることはできないが、溝の構築されている場所が緩傾斜地であり、砂質ロームで水はけが良いので、排水溝を掘る必要性は考えられない。しかし、これらの溝は、縄文人が、何かの目的をもって構築した土木事業であることは確かである。

表35 溝一覧表

溝番号	主軸方向	長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	高低差(cm)
S D 1	N-65°-W	18.8	1.0~2.0	0.4~0.9	30~56	12.0
〃 2	N-65°-W N-26°-E	27.0	0.45~1.08	0.22~0.70	10~28	9.0
〃 3	N-68°-W	16.0	0.6~1.6	0.30~0.90	10~25	45.0
〃 4	N-68°-W	8.0	0.6~1.6	0.30~0.90	10~25	45.0
〃 5	N-30°-E	24.0	0.72~1.42	0.20~0.80	20~28	78.0

第2節 遺物について

1 土器について

小場遺跡から出土した土器のほとんどは縄文式土器であり、その他、少量ではあるが弥生式土器が出土している。縄文式土器としては、中期の阿玉台式、加曾利E式、後期の称名寺式、堀之内式、加曾利B式、安行式、晩期の安行III式、東北系の大洞式に比定される土器が出土している。出土した縄文土器の大半は、後期の称名寺式、堀之内I～II式、加曾利B I～B III式期に比定され、中でも堀之内I～II式、加曾利B I～B III式に比定される土器の出土量が多い。器種としては、深鉢形土器の出土量が最も多く、その他には、鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器、脚付土器、手捏土器等が出土しており、とくに、異形台付土器や香炉形土器、手燭形土器などの特殊な土器も出土している。弥生式土器の出土量は数点を数えるほどであるが、そのいずれも弥生時代黎明期のものと思われる。

これらの土器の大半は、黒色土の遺物包含層と、調査区北側の傾斜地に検出された土器捨場から出土しており、住居跡や土坑等の遺構からの出土は、遺物包含層からの出土に比較して少ない。

ここでは、当遺跡から出土した縄文土器を、説明の便宜上、時期と土器形式を中心にして大きく12群に分類し概略を述べることにする。各群の土器については、遺構ごとに掲載した土器実測図、土器拓影図、及び解説表を参照されたい。

第1群 縄文時代中期前葉の土器

第2群 縄文時代中期中葉の土器

第3群 縄文時代中期後葉の土器

第4群 縄文時代後期初頭から前葉にかけての土器

第5群 縄文時代後期中葉の土器

第6群 縄文時代後期後葉の土器

第7群 縄文時代後期の粗製土器

第8群 縄文時代晩期初頭から前葉にかけての土器

第9群 縄文時代晩期中葉の土器

第10群 縄文時代晩期後葉の土器

第11群 縄文時代晩期の粗製土器

第12群 弥生時代黎明期の土器（「考古学講座」4（弥生文化）雄山閣出版の分類による）

第1群

中期前葉の阿玉台IB式に比定される土器を本群とした。

第163図の35は、第158号土坑から出土したもので、当遺跡では、最も古手の土器であるが、1点だけしか出土しなかった。口縁部には隆帯によって枠状文を施し、枠内には1条の刺突文を巡らしている。胴部には「Y」字状の隆帯を曲線的に貼付している。

第2群

中期中葉の阿玉台II式、加曾利E I～II式、東北系の影響を受けた大木8a式に比定される土器を本群とした。

第1類

阿玉台II式に比定される土器群で、隆帯に沿って、結節沈線文が施されている。遺物包含層出土の第199図4に好資料が見られる。幅の広い隆帯を貼付し、隆帯上と貼付部に沿って結節沈線文が施されている。本類に比定される土器は、ごく少數出土している。

第2類

加曾利E I～II式に比定される土器群で、口縁部文様帶と胴部文様帶に分かれ、口縁部文様帶に、楕円区画文などが施されるものや、細い磨り消し部分がみられるものもある。本類に比定される土器は、数点出土している。第199図8の拓影図は当遺跡北側の土器捨場から出土した資料である。

第3類

東北系の大木8a式に比定される土器群で、隆帯による文様が発達し、口縁部に「S」字状の把手を貼付したものや、小波状の隆帯の貼付などがみられる。第165図46は、第167号土坑から出土した資料で、口縁部は、平面形が楕円形を呈し、長径部には2個1対の「S」字状文を、口縁には隆帯を貼付しており、本類の特徴を良く表現している。本類に比定される土器は、1点だけ出土している。

第3群

中期後葉の土器で、大木9式、加曾利E III～IV式に比定される土器を本群とした。

第1類

大木9式に比定される土器群で、「U」字文、縦長の楕円文、逆「U」字文など多様な区画文と磨消繩文を施しているものが多くなる。第188図3は、遺物包含層から出土した土器で、逆「U」字状の区画文と磨消繩文を施し、橋状把手を付している壺形土器の資料である。本類に比定される土器は1点だけ出土している。

第2類

加曾利E III式に比定される土器群で、加曾利E II式に現れはじめた磨消手法が盛行し、胴部の磨消繩文帯の幅が広くなってくる。口縁部文様帯は、渦巻文が退化し、梢円区画、長方形区画が見られる。更に新しくなると、口縁部文様帯は列点文や沈線文のみで構成されるようになる。胴部には、隆帯による大きな渦巻文や、曲線的な磨消手法、U字文、W字文、H字文などを施す土器が見られる。器形としては、口縁部が浅く内彎し、口縁部文様帯を隆帯や沈線によって区画し、胴部に幅の広い磨消帯を持つものが中心である。本類の土器は、加曾利E I～II式に比較して多く出土しているが、全体からみると少量である。本類の資料としては、第82号土坑から出土した第161図18や、土器捨場から出土した第199図11などがあげられる。

第3類

加曾利E IV式に比定される土器群で、E III式から発達し、微隆起線文が多く用いられる土器である。細い沈線区画による磨消手法がみられる。器形としては、括れの著しい深鉢形土器を中心とするが、当遺跡からの出土量は少なく、大半は土器片である。本類の資料としては、土器捨場から出土した第199図19がみられる。

第4群

後期初頭から前葉にかけての土器で、称名寺式、網取式、堀之内式、三十稻場式に比定される土器を本群とした。

第1類

称名寺I～II式に比定される土器群で、磨消繩文が盛行するI式と、沈線文、刺突列点文が多く用いられるII式とに大別できる。I式は胴部が著しく括れる深鉢形土器を中心で「し」の字文、「7」の字文、スペード文などの文様が施されるものが多い。II式になると、緩やかな括れに変化し、堀之内I式に近くなる。本類の資料としては、第125号土坑出土の第162図27、第160号土坑出土の第164図40、第222号土坑出土の第167図59があげられる。

第2類

東北系の網取I～II式に比定される土器群で、釣針状の「J」字文や磨消繩文を主とするI式と、ワラビ手文や「J」字文あるいは、蛇行する縱位のジグザグ文が盛行し、口唇部に装飾を施してあるものも見られるようになるII式とに大別できる。本類の資料としては、第222号土坑出土の第167図57、土器捨場出土の第202図47～51があげられる。

第3類

堀之内I～II式に比定される土器群で、I式の初期のモチーフは、ワラビ手文、卵形文、蛇行沈線文などが独立して施される。新しくなるにつれて、これらが斜位に結ばれるようになる。II

式になると、上下を沈線によって区画された文様帶を有し、幾何学状、入組状、菱形状などの磨消繩文を主とする文様が施され、次第にその幅が狭くなり、帯状の繩文帶を施すだけの単純なものとなる。本類の資料としては、第337号土坑出土の第169図67、物包含層出土の第196図60・61等にその例を見ることができる。本類に属する土器群は、第5群の土器群とともに、当遺跡から最も多く出土している土器群である。

第4類

三十種場式に比定される土器群で、棒状あるいはヘラ状施文具で、刺突を繰返して文様を構成している。刺突の方法にも花弁状、うろこ状、爪形状などがある。本類の資料としては、土器捨場から第201図34の土器片が1片だけ出土している。

第5群

後期中葉の加曾利B式、曾谷式に比定される土器を本群とした。加曾利B式土器は当遺跡の中で、最も出土量の多い土器群である。

第1類

加曾利B I式に比定される土器群で、鉢形土器が多くなる。I式の文様は、横位の磨消繩文に特色がみられる。また、口縁内面には、数条の沈線を施し、沈線間に連絡溝を施したり、キザミ目や繩文を施しているものもある。本類の資料としては、第205号土坑出土の第167図54・56、遺物包含層出土の第188図4、第195図54があげられる。

第2類

加曾利B II式に比定される土器群で、磨消繩文の手法が盛行し、曲線的なモチーフが中心となる。また、斜位、格子状の沈線文が特徴的となり、弧線文や入組状文が特色である。また、各種の異形土器が発達する。本類の資料としては、第75号配石出土の第39図13、第166号土坑出土の第165図45があげられる。

第3類

加曾利B III式に比定される土器群で、幅広い直線的、曲線的磨消繩文による構成が特色となる。また、口縁部や胴部に施される沈線間に、刺突文、キザミ目文などを施すものが多くみられる。器形も多種多様となり、深鉢形土器でも、ひょうたん形を呈したり、内傾するものが見られる。本類の資料としては、遺物包含層出土の第206図125～130があげられる。

第4類

曾谷式に比定される土器群で、加曾利B式から安行式への過渡的な形式として位置づけられている。口縁は波状を呈して突起を貼付し、口縁部文様帶には綾杉状の沈線文を施している。本類の資料としては、土器捨場出土の第186図10があげられる。

第6群

後期後葉、安行I～II式、東北系の金剛寺式、新地式に比定される土器を本群とした。

第1類

安行I～II式に比定される土器群で、I式は、大波状縁、平縁の深鉢形土器、鉢形土器、台付鉢形土器などが主流となり、隆起帯繩文帯が施され、要所に瘤状突起を貼付するものが特徴となる。II式は、器形や文様はI式を受け継いでおり、隆起帯繩文上に付される突起には、継位のキザミが加えられるようになる。また、隆帯上には繩文にかわりキザミが施されることが多くなる。本類の資料としては、第103号土坑出土の第191図24、第25号住居跡出土の第117図5があげられる。

第2類

東北系の金剛寺式に比定される土器群で、貼瘤文の全盛期となり、器形も、深鉢、鉢、浅鉢、壺など各器が存在する。文様構成は、平行帯繩文、平行沈線、弧状文などによる入組磨消繩文で構成するものがみられる。本類の資料としては、土器捨場出土の第208図165が好資料である。

第3類

第2類の金剛寺式と同様に、東北系の新地式に比定される土器群で、深鉢をはじめ、鉢、浅鉢、皿、注口、壺、香炉等の器形に貼瘤文を付す土器である。本類の資料としては、土器捨場出土の第208図166が好資料である。

第7群

後期の粗製土器を一括して本群とした。

繩文地文上に斜行の粗い沈線を施すものが多くみられる。また、口縁部に隆帯を貼付し、指頭状の押圧を加えている。本群の資料としては、遺物包含層出土の第207図143～146などがあげられる。

第8群

晩期初頭から前葉にかけての土器で、安行3a～3b式、大洞B式、大洞BC式に比定される土器を本群とした。

第1類

安行3a～3b式に比定される土器群で、大波状縁の深鉢、平縁の深鉢、鉢、注口土器などが主なものである。入組玉抱き三叉文、楕円区画文、平行沈線文間の列点文、弧状文、入組磨消繩文などに特色をもつ土器が多くなる。本類の資料としては、第115号土坑出土の第162図26などがあげられる。

第2類

大洞B～BC式に比定される土器群で、口縁部文様帶には玉抱き三叉文、入組三叉文などが多くみられる。また、BC式土器には羊齒状文が施されている。本類の資料としては、遺物包含層出土の第197図65、第208図171・172などがあげられる。

第9群

晩期中葉の大洞C1式、C2式に比定される土器を本群とした。

第1類

大洞C1式に比定される土器群で、磨消繩文手法が著しく発達する。大腿骨文、「K」字文、「人」字文、雲形文と呼ばれる文様が主となって器面を飾っている。本類の資料としては、遺物包含層出土の第197図68、71、第198図73があげられる。

第2類

大洞C2式に比定される土器群で、磨消繩文手法がやや硬直化して、直線に近い形状を呈するよう変化していく。また、眼鏡状隆帯といわれるものが付されるようになる。本類の資料としては、遺物包含層出土の第198図74、75、76があげられる。

第10群

晩期後葉の大洞A～A'式に比定される土器を本群とした。

大洞A式土器は、C2式土器に統くもので、直線化した沈線文の他に浮線網状文、「工」字文を特色とし、地文の繩文はなくなる傾向にある。本群の資料としては、遺物包含層出土の第198図77があげられる。

第11群

晩期の粗製土器を一括して本群とした。

器形は深鉢形土器が多く、口縁は複合口縁を呈している。胴部文様帶には、沈線による網状文や撚糸文、櫛齒文などが盛んに施されている。本群の資料としては、遺物包含層出土の第210図201～224があげられる。

第12群

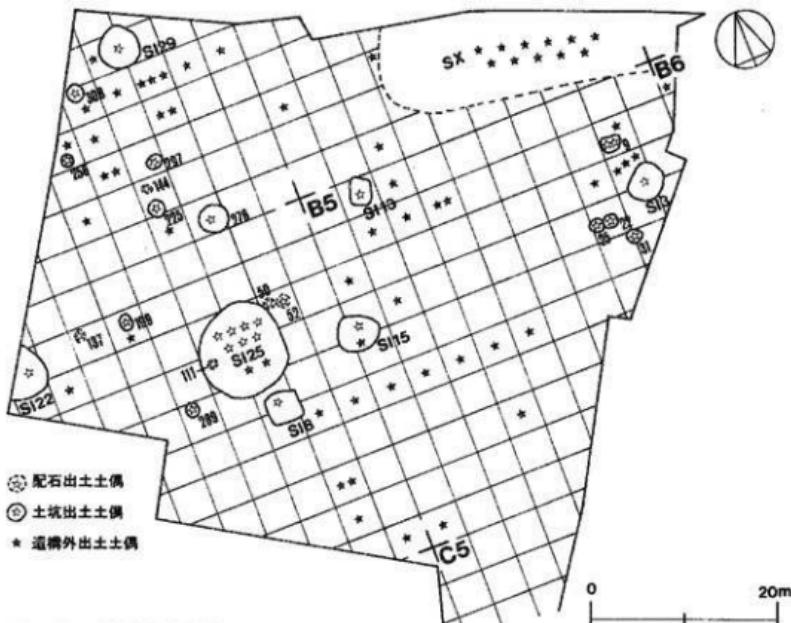
弥生時代黎明期に含まれる土器を本群とした。

遺物包含層から出土した第198図78は、胴部文様帶に沈線区画を施し、細かい繩文地文上に2条の沈線によって、波状文の上下に突起を付したような曲線的モチーフを描き、沈線間を磨り消している。黎明期初頭の弥生式土器に含まれるものではないかと思われる。79も本群に含まれると

思うが、当遺跡の最も新しい土器であると考えられる。

2 士偶について

当遺跡から出土した土偶の数は、101点を数えるが、完形品は1例もなく、すべて破損した状態のものである。遺構から出土したものは29点で、その内、配石から出土したものが5点、住居跡、土坑から出土したものがそれぞれ12点である。遺構外からは72点出土している。遺構外の表面採集分の10点を除いて出土分布の状態を第268図でみると、調査区北側の土器捨場から11点、東側の調査区B5c付近から6点、北西部のコーナー付近から15点出土している。残りの40点については、調査区中央部付近を主にして、散在した状態で出土している。土偶の出土状態は、全体的に特異な出土状態を示したものは認められなかった。また、当遺跡出土の土偶は、各々伴出した土器と同一の時期に決定することができないために、土器を基準にした時期的な分類を行うことはできなかった。従って、土偶の分類は、磨滅の著しいものや、腕、脚の一部しかなく分類不可能なもの



第263図 土偶出土分布図

のは除外し、土偶の形態、文様構成をもとに分類可能な27点について次のように分類した。

A類 ハート形土偶

一般的には、後期初頭の堀之内式土器に伴って出土する土偶である。この類の土偶は、顔面がハート形か橢円形で上向きになったものが多く、肩は水平に張り、腕は短く、胸部は細く、腰から足にかけては極端に大きく安定が良い。本類の資料としては、第214図6・13、第215図17・18・21・23・24・27、第216図33・34、第217図53～56・60などがあげられる。

B類 山形土偶

一般的には、後期中葉の加曾利B式土器に伴って出土する土偶である。この類の土偶は、頭部は三角形状を呈し、胸部には乳房を貼付し、下腹部は張り出して妊娠している状態を示しているところに特徴がある。本類の資料としては、第214図3・4・7・14、第215図25、第216図51などがあげられる。

C類 木菟形土偶

一般的には、後期後葉の安行I・II式土器に伴って出土する土偶である。頭部には、突起状やひさし状の装飾を有し、結髪の表現を示している。本類の資料としては、第214図5があげられる。

D類 晩期土偶の中で中空土偶として一括した。

本類の資料としては、頭部の破片(第215図19)と脚部の破片(第217図66)の2点が出土している。

E類 晩期土偶の中でD類以外のものを一括した。

本類の資料としては、第214図9、第217図63・67があげられる。

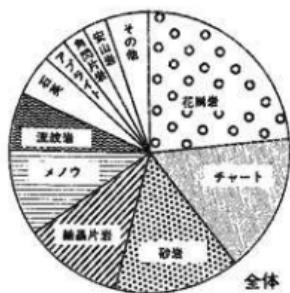
3 石器について

当遺跡で出土した石器は、25種類で、総数2,580点である。出土数の多いものは、磨石695点、石鎌583点などである。他には、凹石281点、石斧類229点、石錐173点、石棒119点、石剣97点、石錐114点などが主なものである。玉や独鉛石、石冠なども、数は少ないが出土している。第269図は、種類別出土点数の割合を表わしたグラフである。これをみると、磨石、石鎌の2種類が特に多く、全体の約50%を占めていることがわかる。また、狩りや漁撈の道具と考えられる石鎌や石錐が29%以上を占めている。このことは、当遺跡は、西方に阿武隈山地を背にし、東方には太平洋に注ぐ関根川が近くに位置しており、狩猟、漁撈や採集生活に最適の地であったことが推察できる。特に、石錐が173点も出土しており、土錐や土器片錐と合わせると、漁網錐としては520点の多数を占めることになり、盛んに漁撈が行われていたものと思われる。物を加工するための道具と考えられる石錐、石匙、スクレイパー、石斧類は、17%を占めている。調理のための道具と考えられる磨石、敲石、石皿、凹石等は45%を占めており、中でも磨石が全体の25%を占めていることは、当遺跡が豊かな食料に恵まれていたことをうかがい知ることができる。また、祭祀用の道具と考えられる石棒や石剣が、全体の8%をこえて出土していることは、当遺跡が、祭祀の場としても使用されていたことを物語っている。

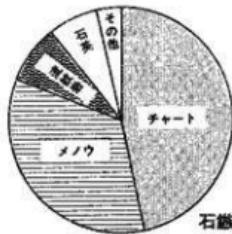
石器として利用されている石質は、24種類を数えるが、第270図でみると、上位5位の花崗岩、チャート、砂岩、結晶片岩、メノウが、全体の75%以上を占めている。次に、石器の種類でこの石質をみると、第270図のとおりで、石器の用途に応じて適切な石質を選択して使用していることがうかがえる。石鎌、石錐、石匙、スクレイパーなどは、チャートやメノウなどの硬く緻密な石質が利用されており、磨石、石皿、凹石などは、目の粗い花崗岩が多く使用されている。石棒、石剣、石錐、石斧類は、結晶片岩などの片岩系の石質の岩石を多く使用している。敲石は、石英や砂岩が多いが、比較的多種類の石質の岩石を使用している。このように多種類の石器を多種類の岩石で作っているということは、近くの阿武隈山地から産出する岩石の種類が豊かであること

(%)										
磨石	石錐	凹石	石棒 石剣	石錐	磨削 石斧	敲石	石錐	石匙 スクレイ パー	打削 石斧	その 他の
26.0	22.6	10.9	8.4	8.7	5.1	4.0	4.6	3.8	3.9	2.5

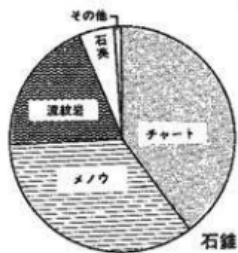
第269図 石器の種類別割合



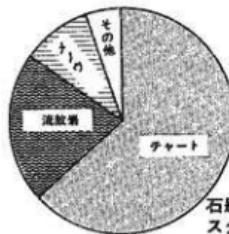
金枝



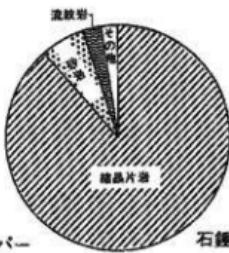
石髓



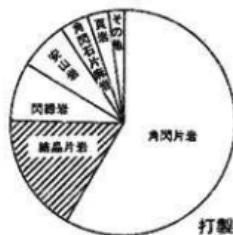
石鍾



石懸



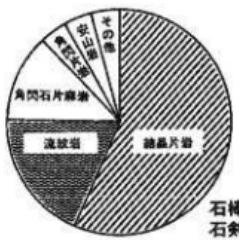
石經



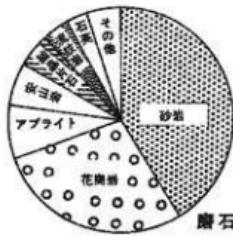
打製石斧



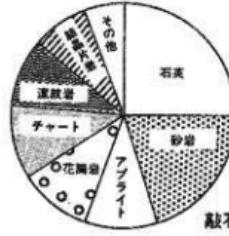
新編石斧



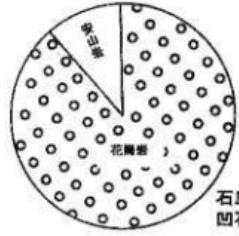
石棒
石劍



贈序



藏石



石壁
凹石

第270図 石器類の石質分類

を物語っている。

当遺跡から出土している石器の中で、数多く出土している磨石や石錐などの石質は、近くの阿武隈山地から産出される岩石を使用していたものと考えられ、数の少ない黒曜石やヒスイなどは、当遺跡の近辺では産出されないことから、かなり遠方との交易が行われていたものと考えられる。

参考文献

- (1) 渡辺 誠著『縄文時代の知識』 考古学シリーズ4 東京美術 1983年
- (2) 金子浩昌著『貝塚の獣骨の知識』 考古学シリーズ10 東京美術 1984年
- (3) 小野美代子著『土偶の知識』 考古学シリーズ18 東京美術 1983年
- (4) 米田耕之助著『土偶』 考古学ライブラリー21 ニューサイエンス社 1984年
- (5) 鈴木道之助著『石器の基礎知識II 縄文』 柏書房 1981年
- (6) 『日本の美術 No191 縄文時代III(後期・晚期)』 至文堂 1982年
- (7) 『季刊考古学』 第11号(動物の骨が語る世界) 雄山閣 1985年
- (8) 『考古』第20号(薄磯貝塚) 福島県立磐城高等学校史学部 1979年
- (9) 『寺脇貝塚』 福島県いわき市教育委員会
- (10) 『新版考古学講座 4』(原史文化(山 弥生文化)) 雄山閣 1979年
- (11) 『神道考古学講座』第1巻(縄文・弥生時代の遺跡遺物) 雄山閣 1981年
- (12) 『縄文文化の研究』第4巻(縄文上器II) 雄山閣 1981年
- (13) 『縄文文化の研究』第7巻(道具と技術) 雄山閣 1983年
- (14) 『縄文文化の研究』第9巻(縄文人の精神文化) 雄山閣 1983年
- (15) 『河内下郷遺跡群IV 四十内遺跡』 福島県郡山市教育委員会 1984年
- (16) 『福島県文化財調査報告書第148集』 荒小路遺跡 福島県教育委員会 1985年
- (17) 『神奈川県埋蔵文化財調査報告 13』 尾崎遺跡 神奈川県教育委員会 1977年
- (18) 『神奈川県埋蔵文化財調査報告 14』 下北原遺跡 神奈川県教育委員会 1977年
- (19) 『信濃 第33巻 第4号』 信濃史学会
- (20) 『茨城県教育財団文化財調査報告 第28集 大谷津A遺跡(F)』 茨城県教育委員会 1985年
- (21) 『縄文土器大成 第3巻 後期』 講談社 1981年
- (22) 『縄文土器大成 第4巻 晩期』 講談社 1981年
- (23) 『歴史公論 9 縄文人の精神生活 No94』 雄山閣 1983年
- (24) 『月刊 考古学ジャーナル 11 №254』 ニューサイエンス社 1985年
- (25) 『貝鳥貝塚調査報告 土製品』 岩手県花泉町教育委員会 1971年

終 章 む す び

常磐自動車道の建設設計画に伴い、ルート内の埋蔵文化財の発掘調査は、昭和53年度に始まり、遂次ルートに沿って北上しながら28遺跡の発掘調査が実施されたが、昭和60年度の小場遺跡、細原遺跡の整理業務をもって、全て終了の運びとなった。

小場遺跡は、先に述べたように、昭和59年4月1日から同年12月25日までの9か月にわたって発掘調査が実施された。調査の結果、遺跡の立地する阿武隈山地から東へ張り出した台地の先端部に、縄文時代の数多くの貴重な遺構や遺物が検出され、縄文時代中期から晩期にかけて古代人が生活を営んだ跡であることが判明した。

出土遺物は、収納箱にして約850箱という膨大な数量になり、古いものでは中期前葉に比定される阿玉台I b式期の土器片から、最も新しいものでは弥生時代黎明期初頭のものと思われる土器まで多様である。中でも後期後葉の瘤付土器や大洞式期の土器には、東北系の影響を受けたと思われる土器が多く、当遺跡が、関東と東北の接点に位置していることが理解できる。

検出された29軒の住居跡は、縄文時代の後期中葉に11軒と最も多くなり、後期後葉から晩期にかけて減少している。当遺跡は、後期中葉頃に集落が最も栄えていたものと考えられる。また、数多く検出された配石遺構は、前章で述べたように、後期後葉から晩期にかけて盛んに構築されていたものと考えられる。これらのことから推測すると、当遺跡が、集落として最も盛んに機能していた時期は後期中葉頃であり、その後、後期後葉から晩期にかけては、集落としてよりも、祭祀あるいは葬送の場として、より盛んに機能していたのではないだろうか。このことについては、出土遺物が深鉢形土器や浅鉢形土器ばかりではなく、異形台付土器、香炉形土器、手燭形土器、注口土器、ミニチュア土器、土偶、石棒、石剣、石冠など、祭祀的性格を持った遺物が数多く出土していることからも窺い知ることができる。

当遺跡は、阿武隈山地から東へ張り出した台地の先端部に位置しており、調査区の西側に広がる台地からも、土器片や土偶、石器などの遺物が表面採集されているので、当遺跡の中心部は、調査区域の西側へと広範囲に広がっているものと予想される。従って、今回の調査は、小場遺跡の一部にすぎないので、当遺跡の性格等について全貌を解明するには至らなかった。今後、この膨大な資料を十分に時間をかけて検討していくことによって、小場遺跡の性格等の解明がより進むものと思われる。

なお、この報告書をまとめるにあたり、調査に参加していただいた地元の方々をはじめ、関係各位の御協力や御指導を賜わったことに対し、文末ながら心から感謝の意を表するものである。

附 章 リン・カルシウム、材・種子同定報告について

師 茨 城 県 教 育 財 団

小 場 遺 跡 試 料
リン・カルシウム分析、材・種子同定報告

貴、師茨城県教育財団殿より御依頼のありました、
 小場遺跡試料のリン・カルシウム分析、材・種子同定
 結果が出ましたので、結果を御報告致します。

記

- | | |
|---------------|---------------------|
| 1. リン・カルシウム分析 | P. 1～2 (P. 414～415) |
| 2. 材同定 | P. 3 (P. 416) |
| 3. 種子同定 | P. 4 (P. 417) |

パリノ・サーヴェイ 株式会社

昭和60年2月28日

1 リン・カルシウム分析

1-1 試 料

分析試料は、縄文時代の土壤（SK-170・SK-185・SK-197）の断面から採取された土壤試料である。分析に供した試料は、SK-170のNo.5・SK-185のNo.1, 3, 4, 5, 7・SK-197のNo.3, 5, 計8点である。

1-2 分析方法

過塩素分解を行なった後、リンについてはバナドモリブデン酸法（注1）による全リン酸₅（T-P₂O₅）を、また原子吸光光度計（注2）により全カルシウム（T-CaO）をそれぞれ測定した。

分析方法は以下の通りである。

1. 試料は風乾して0.5mmの粉を全通させて供試した。
2. 水分は加熱減量法により測定した。
3. 試料の一定量を秤取し、はじめにHNO₃により、次にHClO₄により加熱分解を行なつた。
4. 本分解液の一定量を採取し、発色液を加えて比色法により全リン酸を測定した。
5. また別に分解液の一定量を採取し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度法により全カルシウムを測定した。

（注1） 農水省農林水産技術会議事務局監修、土壤養分分析法（養賢堂）

（注2） 改訂詳解肥料分析法（養賢堂）

1-3 分析結果

分析結果は表1に示す通り、全体的に全リン・全カルシウム共に、含有量の高い傾向となつた。また、リンとカルシウムの含有量は比例する傾向にある。ここでは、とくにSK-185において分析試料数が多いのでSK-185を中心に解析する。

試料No.1・3・4・5は、土壤外試料No.7より全リン、全カルシウム含量が高く、その差は大きい。したがって、土壤内に何等かの埋設が考えられる。土壤内の4試料はNo.1とNo.4、No.3とNo.5がそれぞれ近似した値を示している。前者の方が後者よりリン・カルシウムの含量が高く土壤内でも2分される。このことは埋設位置に關係するのかもしれない。

土壤内試料は他にSK-170のNo.5とSK-197のNo.3・No.5があるが全リン・全カルシウ

ム共にSK-185と同様の含有量を示している。

今回の結果は、土壤内に何かが埋設（埋葬？）された可能性は高く、さらに添付資料の土層説明に骨粉の確認がなされているので、増々可能性は高くなる。

表1 分析結果表

採取土壤	試料番号	全リン(T-P ₂ O ₅)	全カルシウム(T-CaO)
SK-170	No 5	3.08	9.03
	No 1	4.41	10.49
SK-185	No 3	2.92	8.67
	No 4	4.22	10.49
	No 5	3.06	8.60
	No 7	0.44	4.41
	No 3	3.14	8.50
	No 5	4.06	9.64
乾物あたりmg/g			

参考文献

土壤養分測定法委員会編　　土壤養分分析法（1975）

2 材同定

2-1 試料

試料はNo 4 試料 1点であった。これは縄文後期とされる土塚SK24内より出土したものである。

2-2 同定方法

試料を乾燥(60°C 8時間)させたのち、木口・柾目・板目三断面を作成、走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微写真図版(PL89)も作成した。

2-3 結果・考察

試料は、クリ(*Castanea crenata*)と同定された。その主な解剖学的特徴は、環孔材で孔圈部は4列、孔圈外で急激に管径を減じ火炎状に配列する。管壁は中庸～薄く、大道管は単独、横断面では梢円形、小道管は単独および2～3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った梢円形～多角形。道管は単穿孔を有し、壁孔は大型で密に交互状に配列。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭である。

クリは、ブナ科の落葉高木で、北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また広く栽培される。その材はやや重硬で、加工はやや困難であるが、強度・耐朽性が大きい。土木・建築材をはじめ、器具・家具材・薪炭材など広い用途が知られており、各地の遺跡から出土例の最も多い樹種の一つである(例えば、千野1983、鈴木・能城・植田1984)。

引用文献

- 千野祐道(1983) 縄文時代のクリと集落周辺植生—南関東を中心に—
東京都埋蔵文化財センター研究論集II P. 25～42
- 鈴木三男・能城修一
・植田弥生(1984) 加工木の樹種 寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編
—P. 699～724

3 種子同定

3-1 試 料

試料は、No 1～No 3 の 3 箱に入った炭化片であった。No 2, 3 は同一地点の記載があったため、これを No 2 として一括処理した。No 1 は SH80 (No 3468) 配石遺構、No 2 は SK31 土壌より検出されたもので、いずれも縄文時代後期のものとされている。

3-2 同定方法

No 2 の試料は、個別に 0.5 mm 未満の微細片は取除いた。0.5～2 mm の細片は、双眼実体鏡下での観察によっても同定は不可能であったので、今回は 2 mm 以上のものについてのみ同定作業を行なった。No 1 試料については、全量を観察・同定した。同時に拡大写真図版 (PL90) も作成した。

3-3 結果と考察

同定結果を一覧表で示す (表 2)。“その他”の大部分は、同定されたいずれかの種に属するものと思われる。完形のものが皆無で、確定的な同定とはいがたいが、この組成からみて、食料として採取・貯蔵していたものではないかと考えられる。

表 2 種子同定結果

種 名	固 体 数		
	No 1	No 2	
<i>Quercus</i> sp.	(コナラ属の一種) *	1	34
<i>Castanea crenata</i>	(クリ)	8	49
<i>Juglans ailanthifolia</i>	(オニグルミ)	6	48
その他		281	
	合 計	15	412

* *Quercus* に属するナラ・カシ類だけでなく *Castanopsis* (シイノキ属) も含まれる可能性がある。いわゆるドングリである。

写 真 図 版



造構全景

PL2



調査前風景



調査前風景



トレンチ発掘(B地区)



C・D・E配石群



B配石群



第8号配石



第9・11・12号配石



第12号配石

PL4



第25号配石



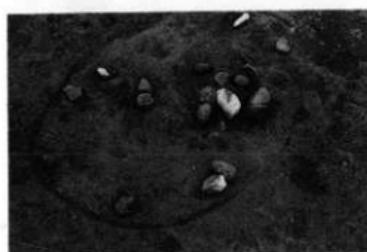
第25号配石



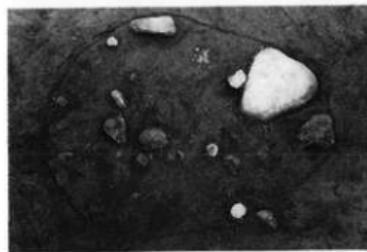
第26号配石



第28号配石



第29号配石



第31号配石



第33号配石



第34号配石



第35号配石



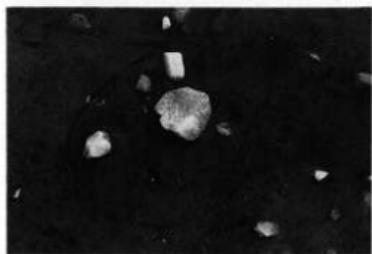
第37号配石



第38号配石



第42号配石



第43号配石



第48号配石遗物出土状况



第55号配石遗物出土状况



第72号配石



第75号配石遗物出土状况



第79号配石



第80号配石遗物出土状况



第81号配石



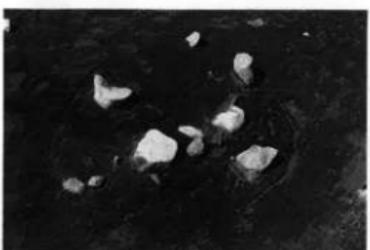
第84号配石



第92号配石



第94号配石



第95号配石



第96号配石



第97号配石



第98号配石



第99号配石



第100号配石



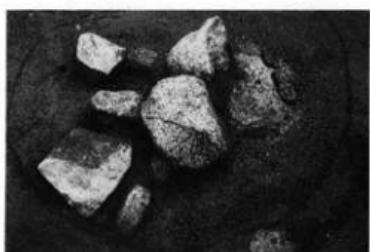
第106号配石



第107号配石



第108号配石遗物出土状况



第112号配石



第115号配石



第116号配石



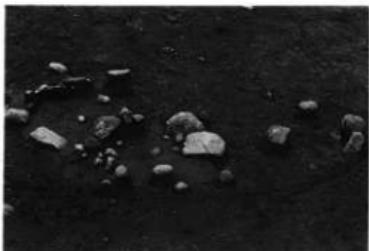
第120号配石



第120号配石



第121号配石



第122号配石



第123号配石



第123号配石遗物出土状况



第123号配石遗物出土状况



第124号配石

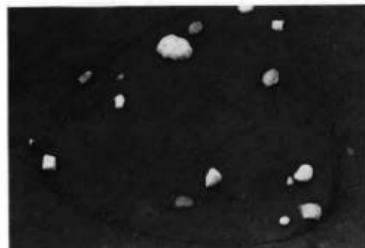


第125号配石



第126号配石

PL10



第129号配石



第130号配石



第133号配石



第134号配石



第135号配石



第136号配石



第138号配石



第141号配石



第142号配石



第143号配石



第146号配石



第148号配石



第149号配石



第150号配石



第151号配石



第151号配石遗物出土状况

PL12



第152号配石



第158号配石



第162号配石



第168号配石



第170号配石遗物出土状况



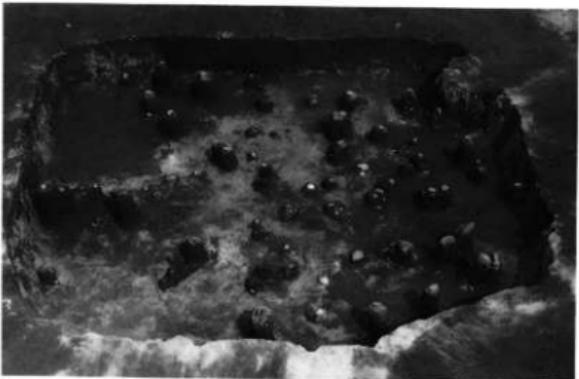
第171号配石



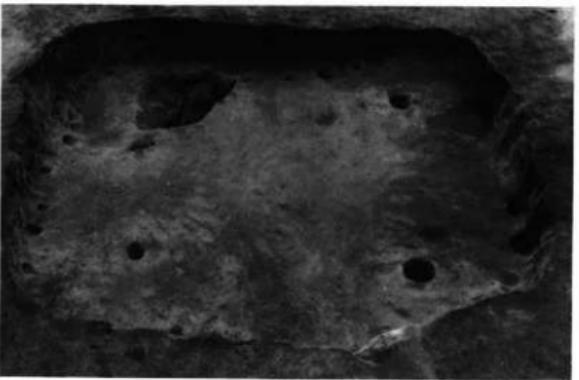
第177号配石



第178号配石



第1号住居跡
遺物出土状況



第1号住居跡



第2号住居跡

PL 14



第2号住居跡
石組炉



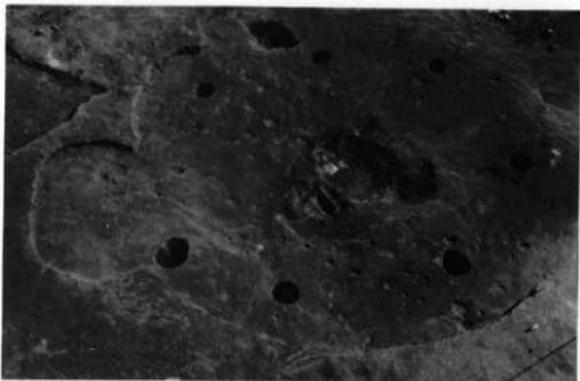
第3号住居跡



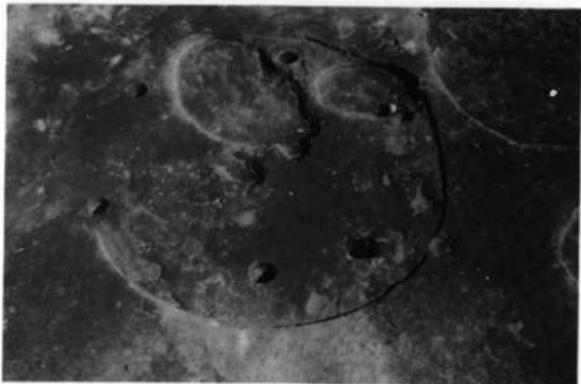
第3号住居跡
石圓炉



第4号住居跡炉
遺物出土狀況



第4号住居跡



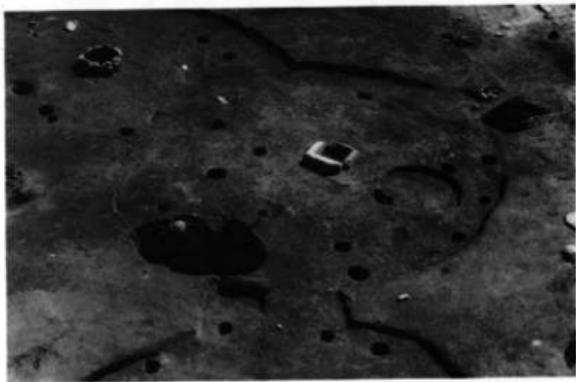
第5号住居跡



第5号住居跡
石組炉



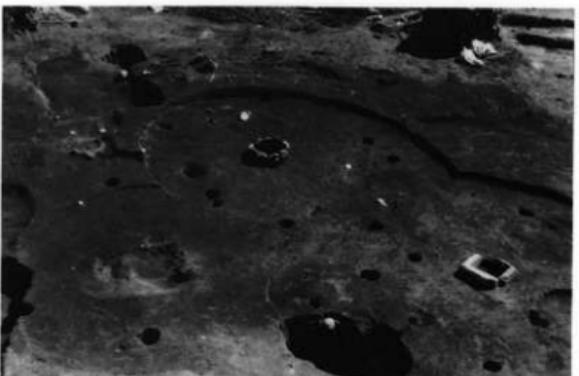
第6号住居跡
遺物出土状况



第8号住居跡



第6号住居跡
石組炉

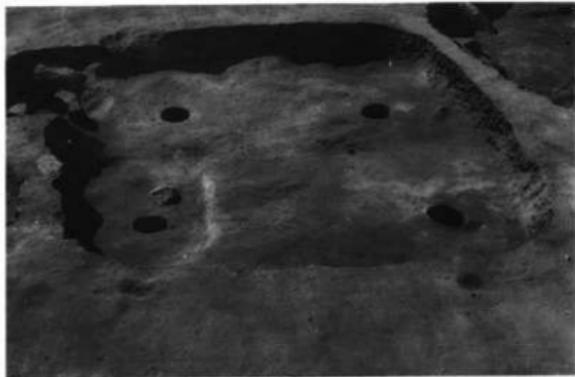


第7号住居跡

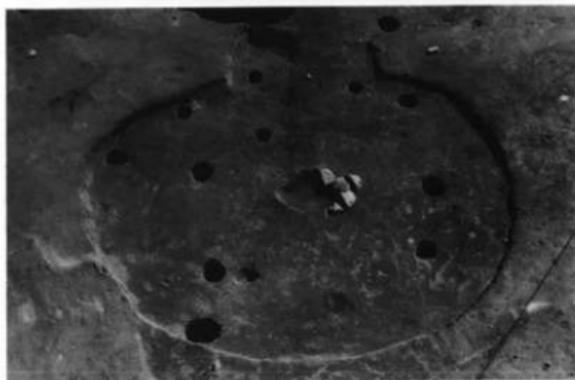


第7号住居跡
石組炉

PL18



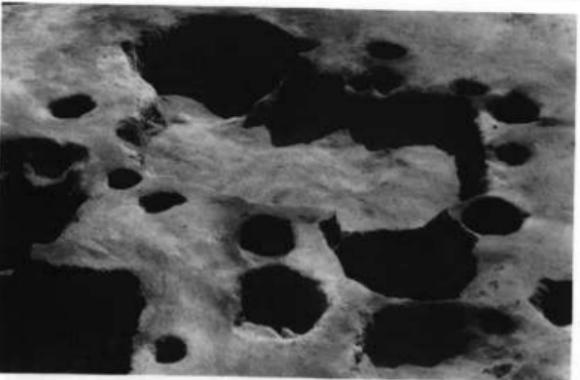
第8号住居跡



第9号住居跡



第10号住居跡



第11号住居跡

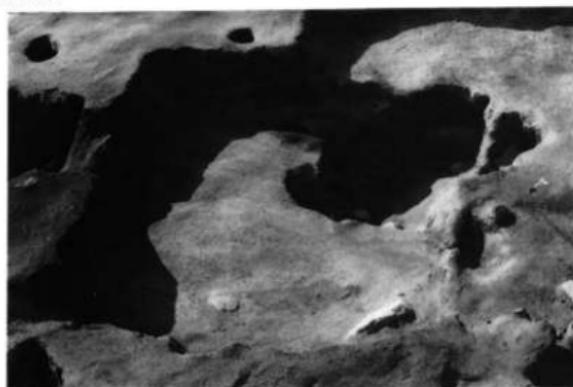


第12号住居跡

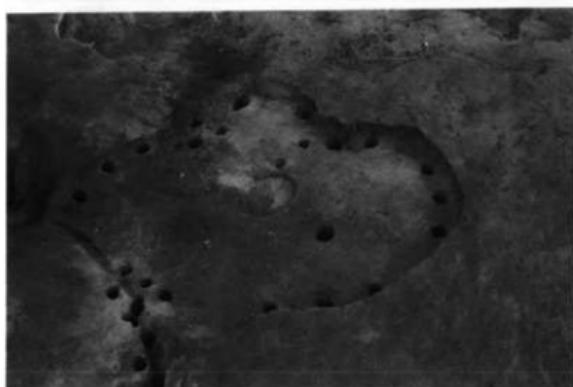


第13号住居跡

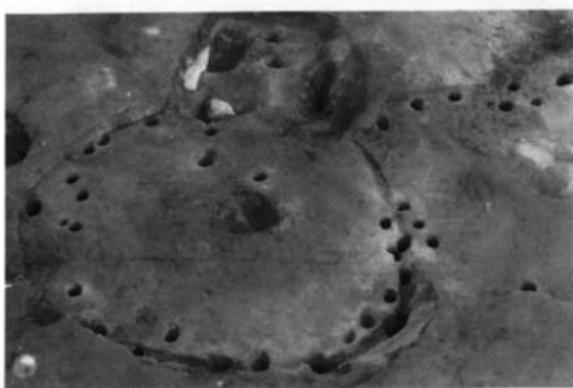
PL20



第14号住居跡



第15号住居跡



第16号住居跡



第16号住居跡
石組炉

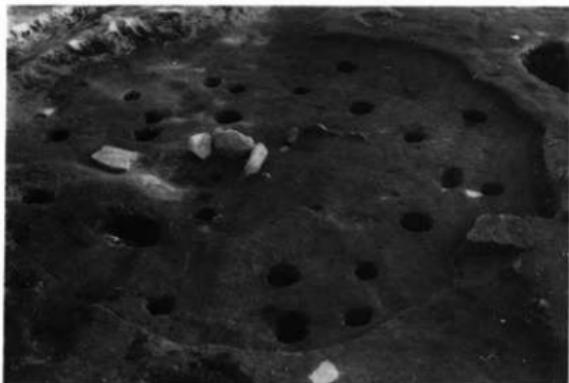


第17号住居跡
石圓炉



第18号住居跡

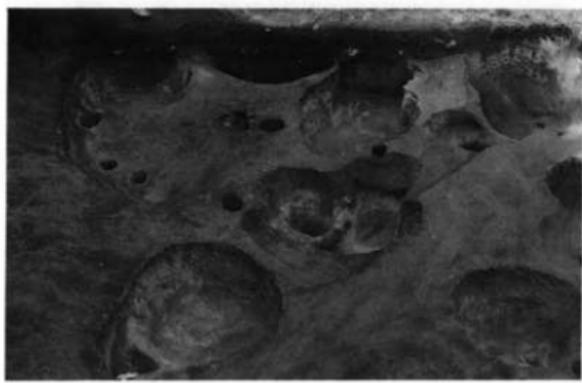
PL22



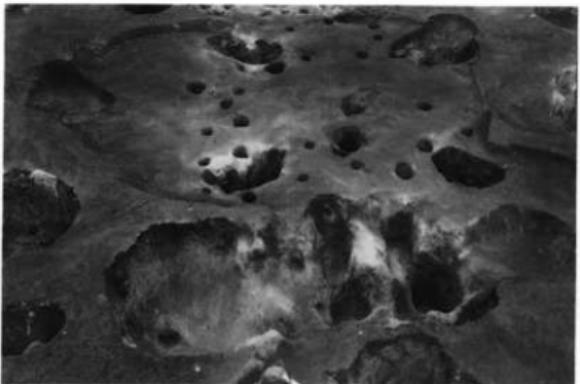
第20•21号住居跡



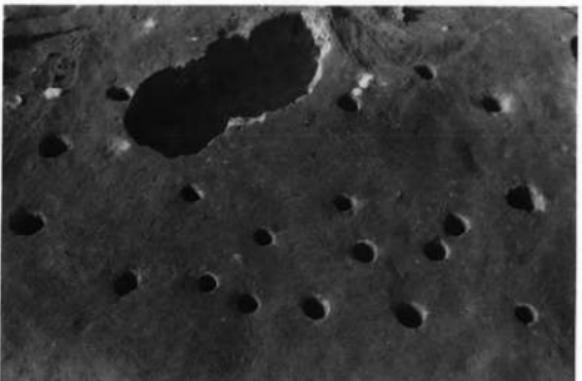
第22号住居跡
遺物出土状況



第22号住居跡



第23号住居跡

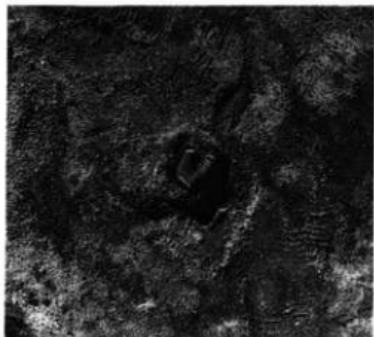


第24住居跡



第25号住居跡
遺物出土状況

PL.24



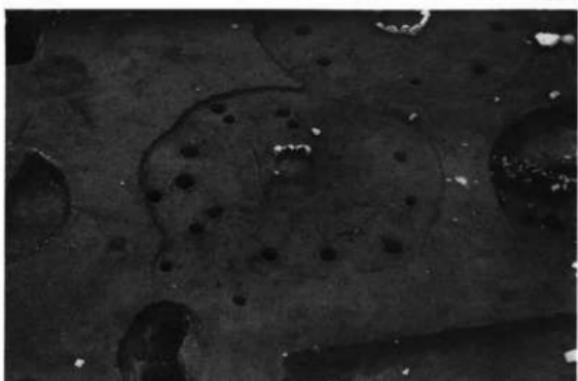
第25号住居跡遺物出土状況



第25号住居跡遺物出土状況



第25号住居跡



第26号住居跡

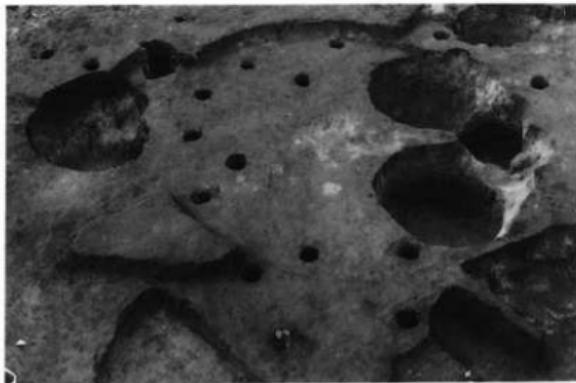


第27号住居跡



第28号住居跡
遺物出土状況

PL26



第28号住居跡



第29号住居跡



第29号住居跡遺物出土狀況



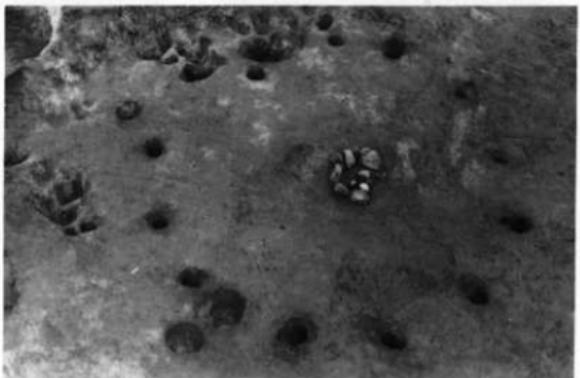
第29号住居跡遺物出土狀況



第29号住居跡
遺物出土状況



第29号住居跡
遺物出土状況



第29・30号住居跡



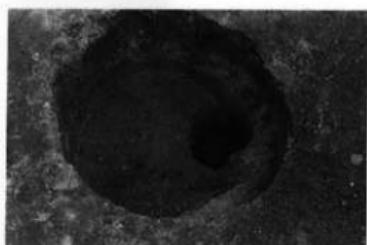
第2号土坑



第5号土坑遗物出土状况



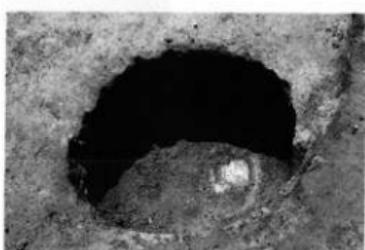
第6号土坑遗物出土状况



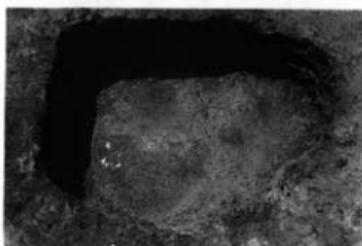
第8号土坑



第9号土坑土层断面·遗物出土状况



第13号土坑



第17号土坑



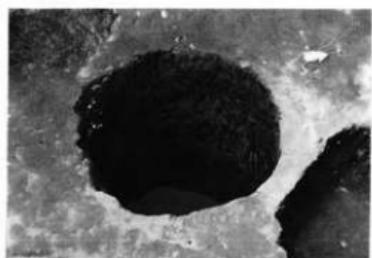
第22·25号土坑遗物出土状况



第22-25号土坑遗物出土状况



第25号土坑遗物出土状况



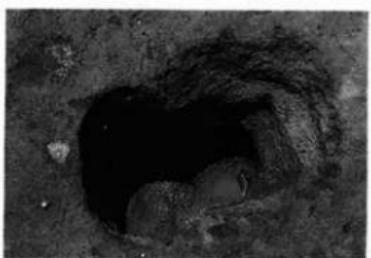
第31号土坑



第31号土坑遗物出土状况



第47号土坑遗物出土状况



第48号土坑

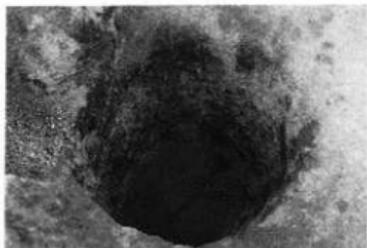


第60-68号土坑



第65号土坑

PL30



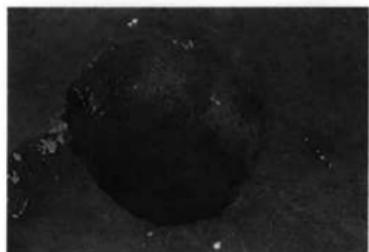
第69号土坑



第71号土坑遗物出土状况



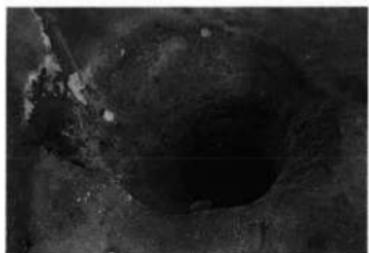
第72号土坑遗物出土状况



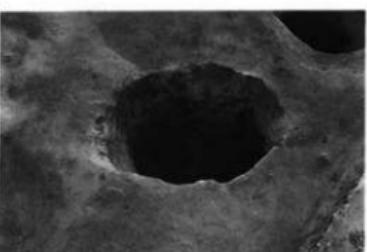
第74号土坑



第83-90号土坑



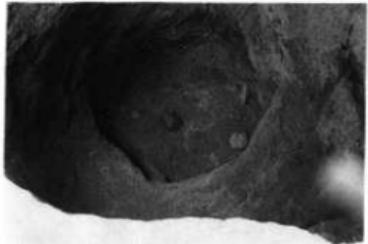
第85号土坑



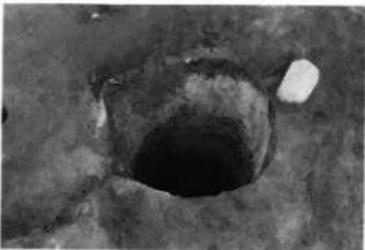
第87号土坑



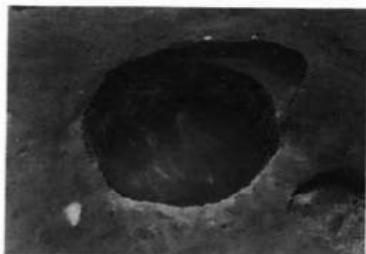
第87号土坑遗物出土状况



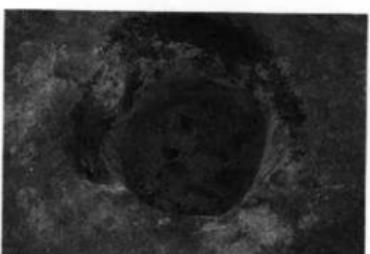
第91号土坑遗物出土状况



第112号土坑



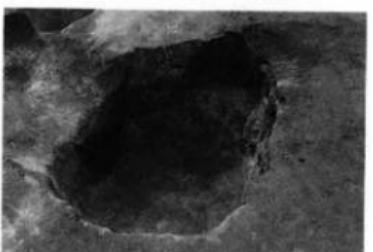
第113号土坑



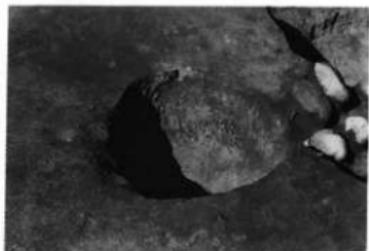
第118号土坑



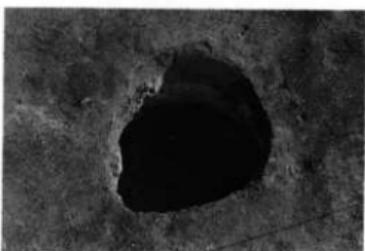
第120号土坑



第123号土坑



第124号土坑



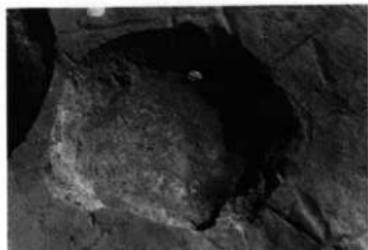
第130号土坑



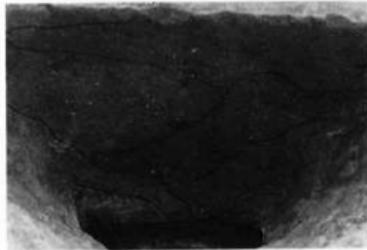
第139号土坑遗物出土状况



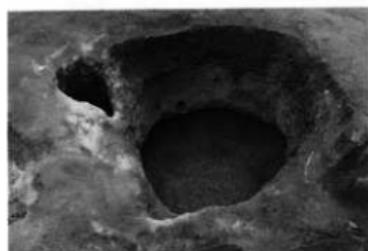
第143号土坑遗物出土状况



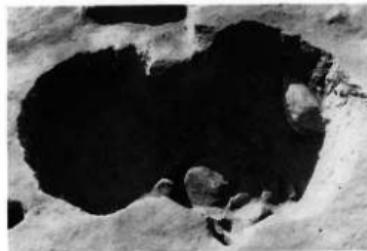
第155号土坑遗物出土状况



第158号土坑土层断面



第158号土坑



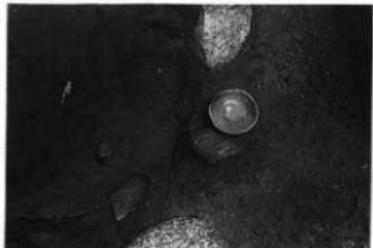
第163·164号土坑



第173号土坑遗物出土状况



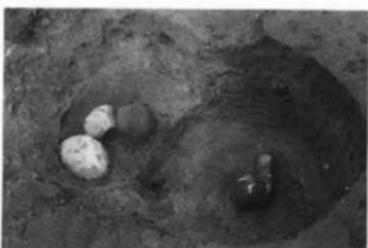
第173号土坑



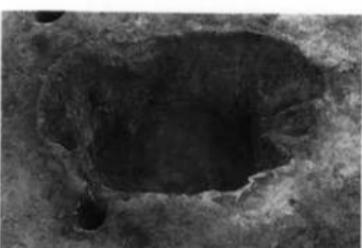
第178号土坑遗物出土状况



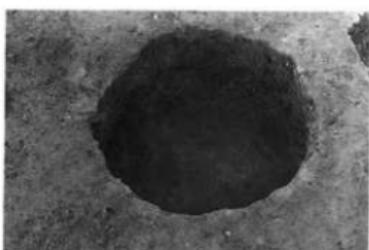
第178号土坑石出土状况



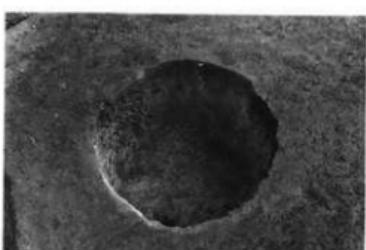
第180·186号土坑遗物出土状况



第184号土坑



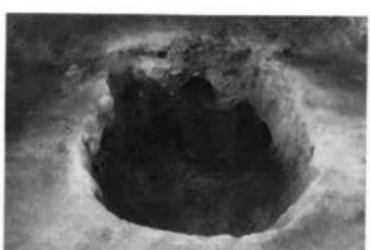
第185号土坑



第188号土坑



第189号土坑石出土状况



第190号土坑

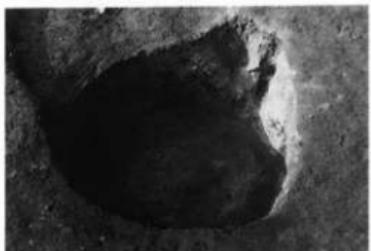
PL.34



第192号土坑遗物出土状况



第193号土坑遗物出土状况



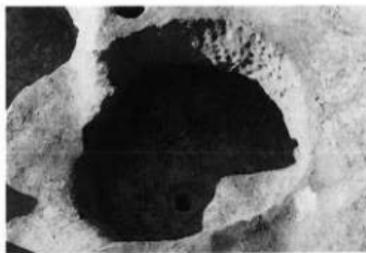
第193号土坑



第194号土坑石出土状况



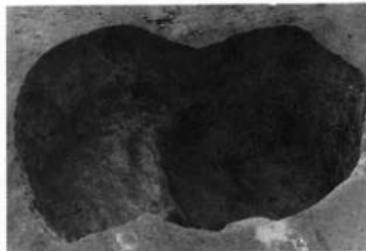
第195号土坑



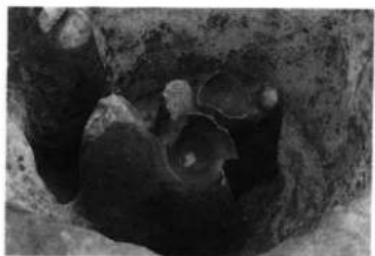
第197号土坑



第200号土坑



第202-294号土坑



第203号土坑遗物出土状况



第203号土坑



第204号土坑石出土状况



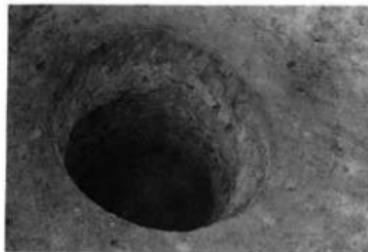
第205号土坑遗物出土状况



第206号土坑



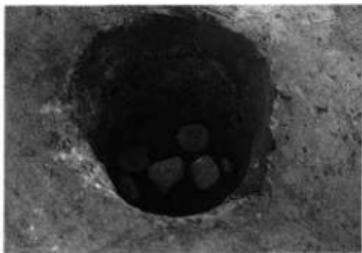
第208号土坑



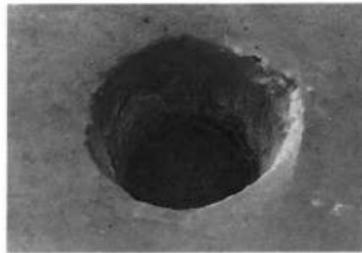
第211号土坑



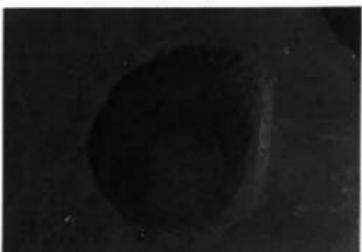
第218号土坑石出土状况



第219号土坑石出土状况



第219号土坑



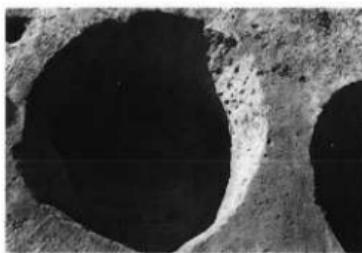
第220号土坑



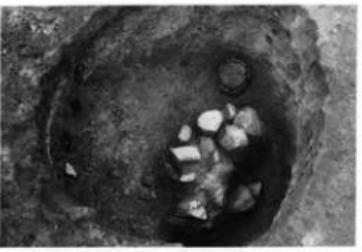
第221号土坑石出土状况



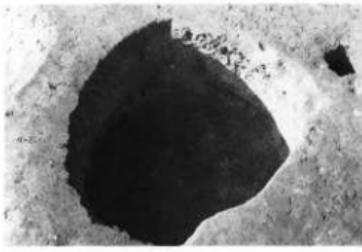
第222号土坑遗物出土状况



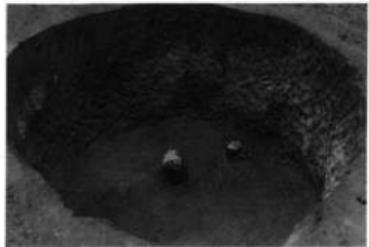
第222号土坑



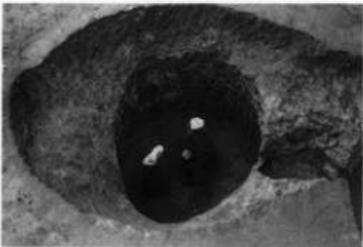
第224号土坑遗物出土状况



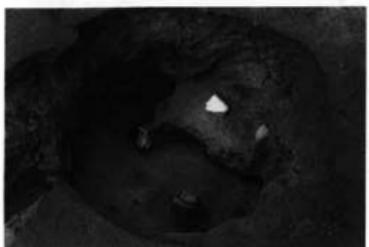
第224号土坑



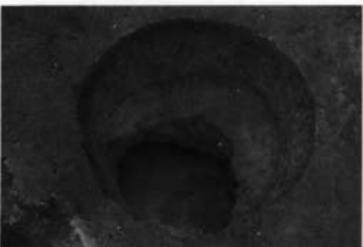
第225号土坑石出土状况



第228号土坑石出土状况



第229号土坑石出土状况



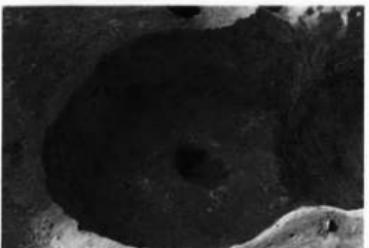
第230-306号土坑



第233号土坑



第234号土坑遗物出土状况



第236号土坑



第238号土坑遗物出土状况

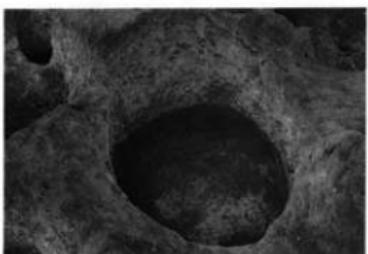
PL38



第239号土坑



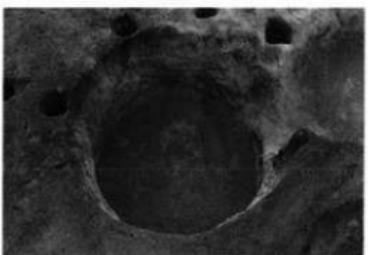
第241号土坑



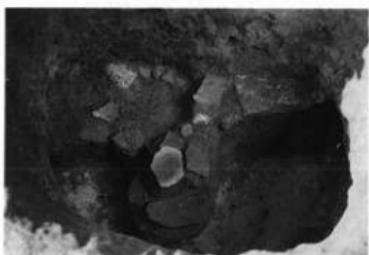
第246号土坑



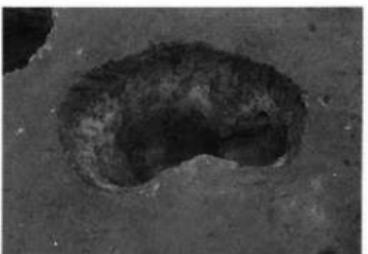
第248·249号土坑土层断面



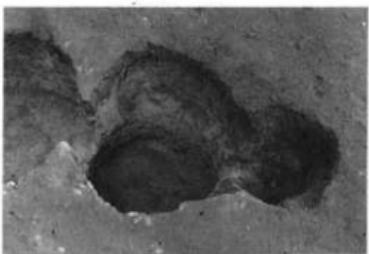
第252号土坑



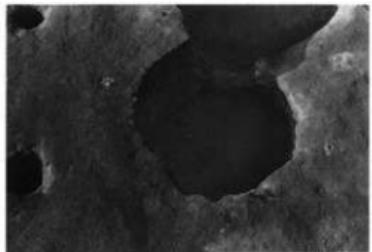
第253号土坑遗物出土状况



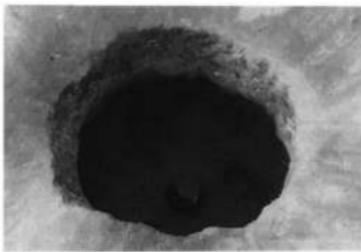
第254号土坑



第255号土坑



第256号土坑



第257号土坑石出土状况



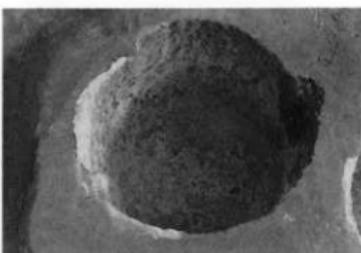
第258号土坑遗物出土状况



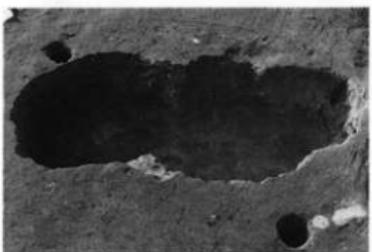
第259号土坑



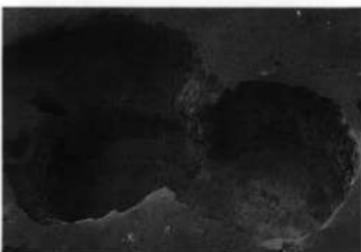
第260号土坑石出土状况



第262号土坑



第264·265·266号土坑

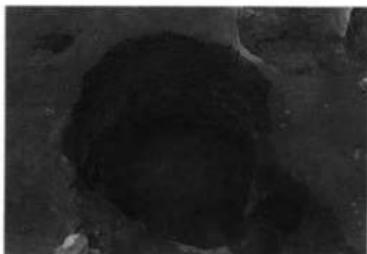


第270·286号土坑

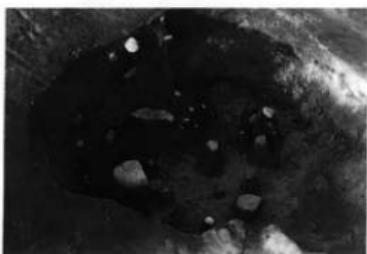
PL40



第271号土坑遗物出土状况



第271号土坑



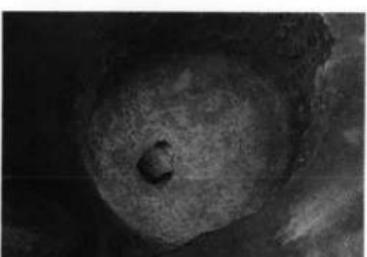
第276号土坑遗物出土状况



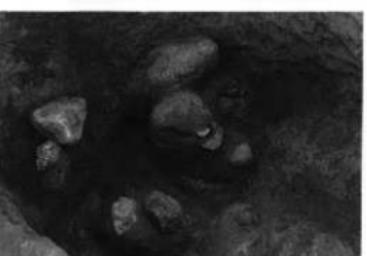
第286号土坑石出土状况



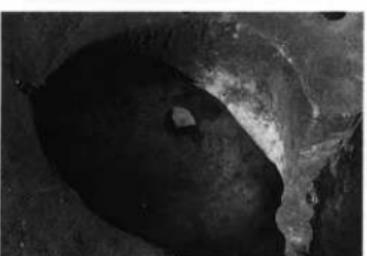
第287号土坑



第290号土坑遗物出土状况



第295号土坑石出土状况



第300号土坑石出土状况



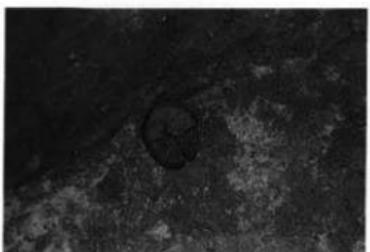
第304号土坑



第304号土坑石出土状况



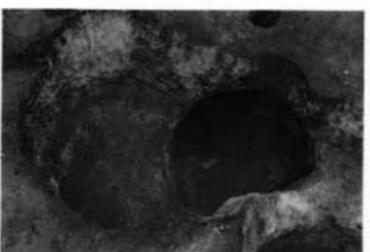
第305-311号土坑



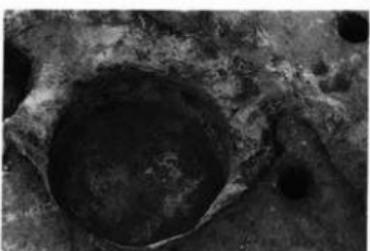
第309号土坑遗物出土状况



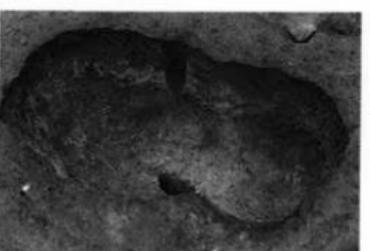
第312号土坑土层断面



第317-318号土坑

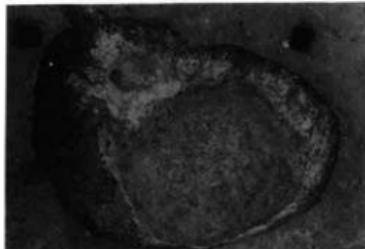


第321号土坑



第325号土坑

PL42



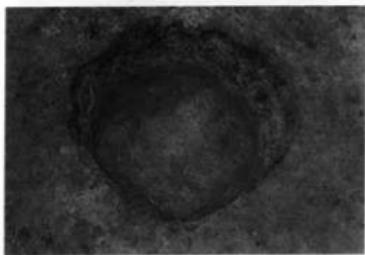
第326号土坑



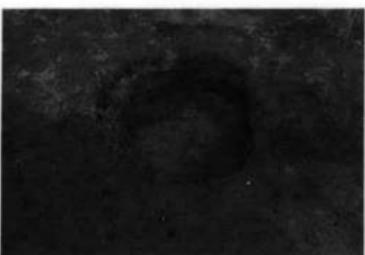
第330号土坑石出土状况



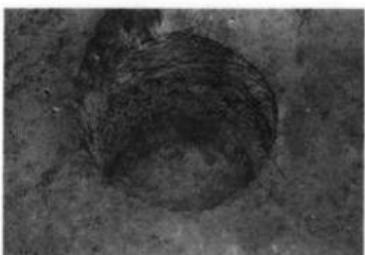
第330号土坑



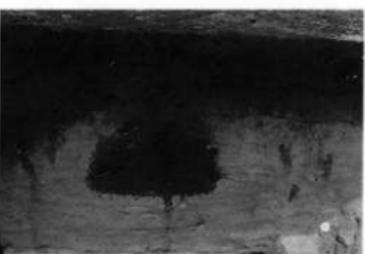
第333号土坑



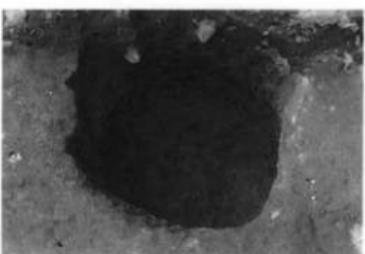
第334号土坑



第335号土坑



第336号土坑断面



第353号土坑



A4e₆区遗物出土状况



A4e₇区遗物出土状况



A4g₆区遗物出土状况



A4g₇区遗物出土状况



A4h₆区遗物出土状况



A4h₇区遗物出土状况



A5j₅区遗物出土状况



B4c₃区遗物出土状况



B4c1区遗物出土状况



B4c1区遗物出土状况



B4c1区遗物出土状况



B4c1区遗物出土状况



B4c1区遗物出土状况



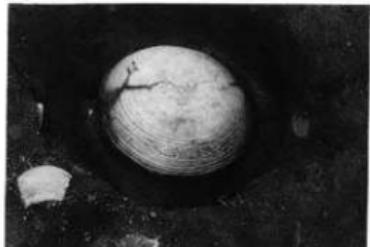
B4d1区遗物出土状况



B4d1区遗物出土状况



B4d1区遗物出土状况



B4d₁区遗物出土状况



B4d₂区遗物出土状况



B4f₂区遗物出土状况



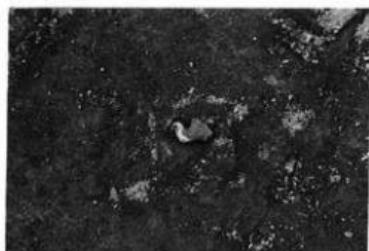
B4h₂区遗物出土状况



B4i₂区遗物出土状况



B4j₂区遗物出土状况



B5a₃区遗物出土状况



B5a₄区遗物出土状况



B5b₉区遗物出土状况



B5c₁区遗物出土状况



B5c₃区遗物出土状况



B5c₄区遗物出土状况



B5c₅区遗物出土状况



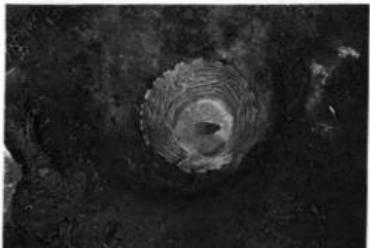
B5c₆区遗物出土状况



B5c₈区遗物出土状况



B5d₁区遗物出土状况



B5d₃区遗物出土状况



B5d₄区遗物出土状况



B5d₅区遗物出土状况



B5d₆区遗物出土状况



B5d₇区遗物出土状况



B5e₁区遗物出土状况



B5e₂区遗物出土状况



B5e₃区遗物出土状况

PL48



B5f₁区遗物出土状况



B5f₁区遗物出土状况



B5f₂区遗物出土状况



B5f₂区遗物出土状况



B5f₃区遗物出土状况



B5f₃区遗物出土状况



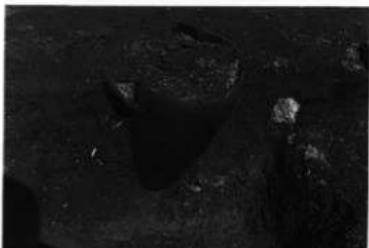
B5f₄区遗物出土状况



B5g₁区遗物出土状况



第95号土坑内埋甕遗構



第95号土坑内埋甕遗構



第140号土坑内埋甕遗構



第161号土坑内埋甕遗構



第166号土坑内埋甕遗構



第338号土坑内埋甕遗構



第337号土坑内埋甕遗構

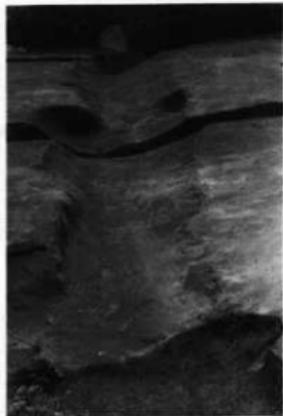


第337号土坑内埋甕遗構

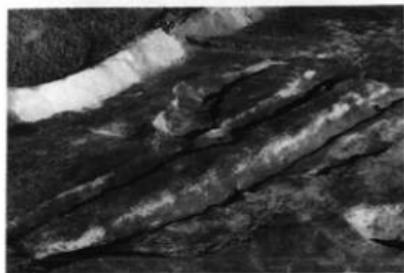
PL50



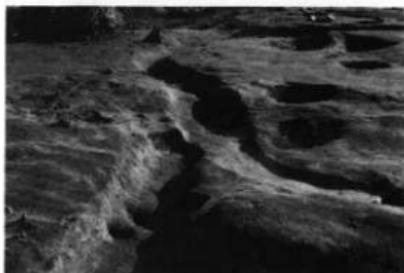
第1号溝



第1号溝



第2・3・4号溝



第2・3号溝



第5号溝



第25号住居跡と作業員



第1号住居跡調査風景



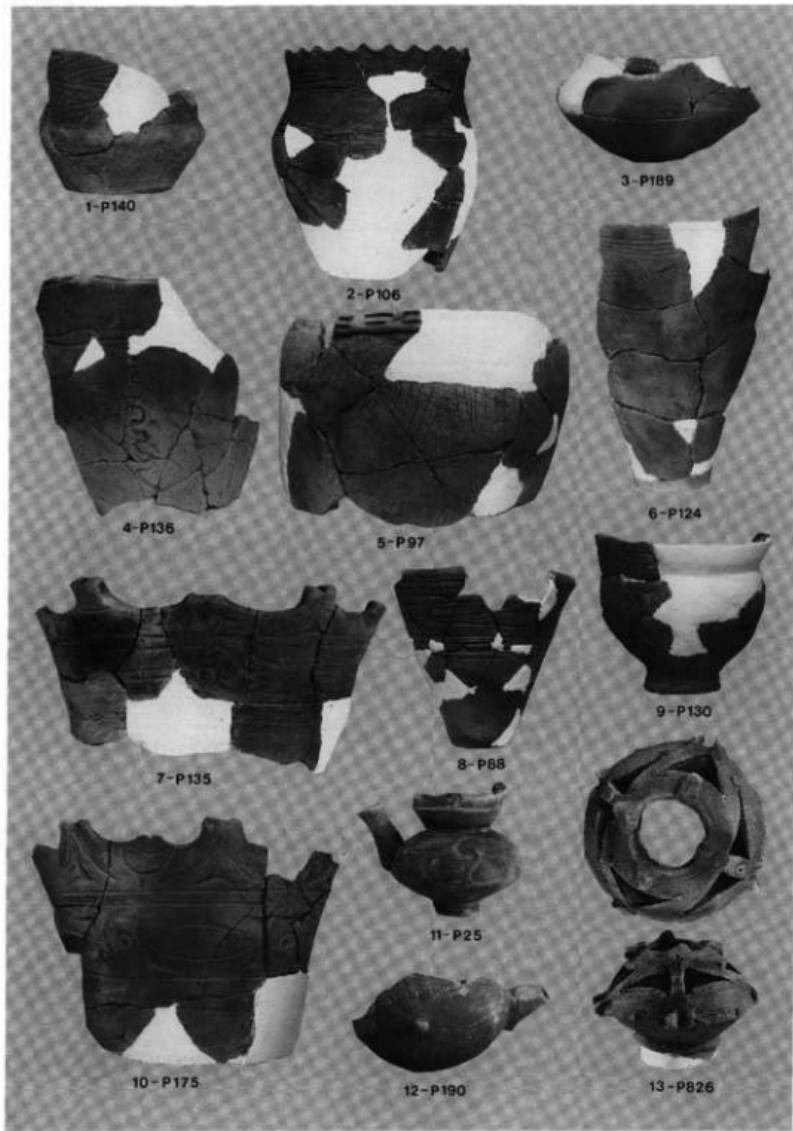
黒色土調査風景



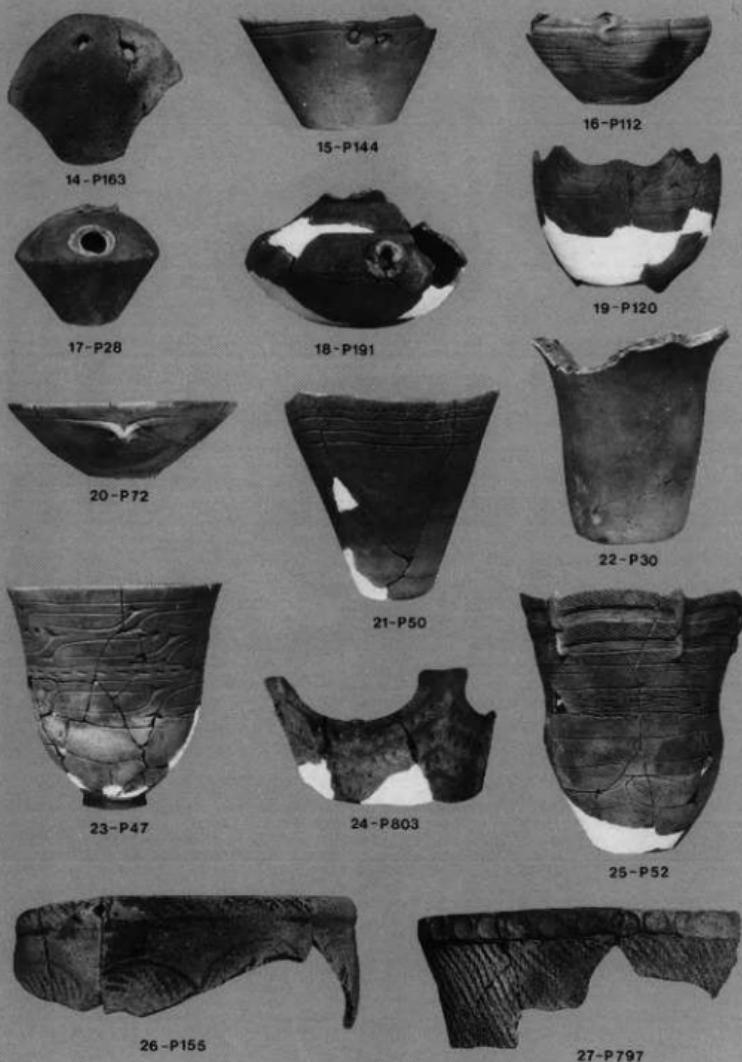
西側部調査風景



遺跡見学

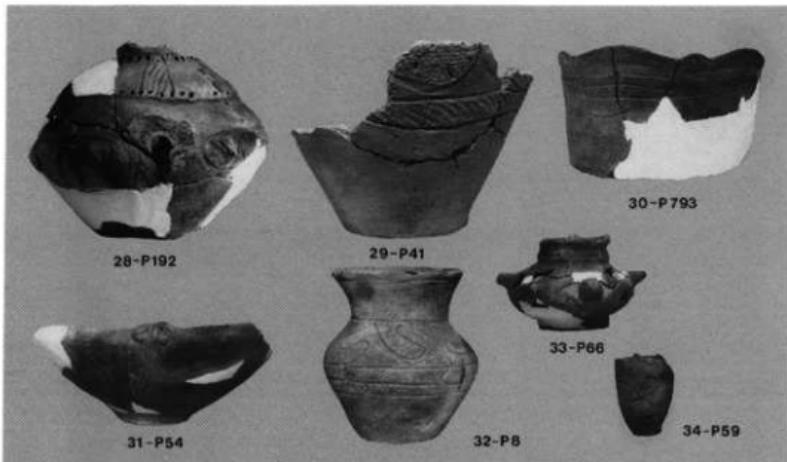


配石出土土器

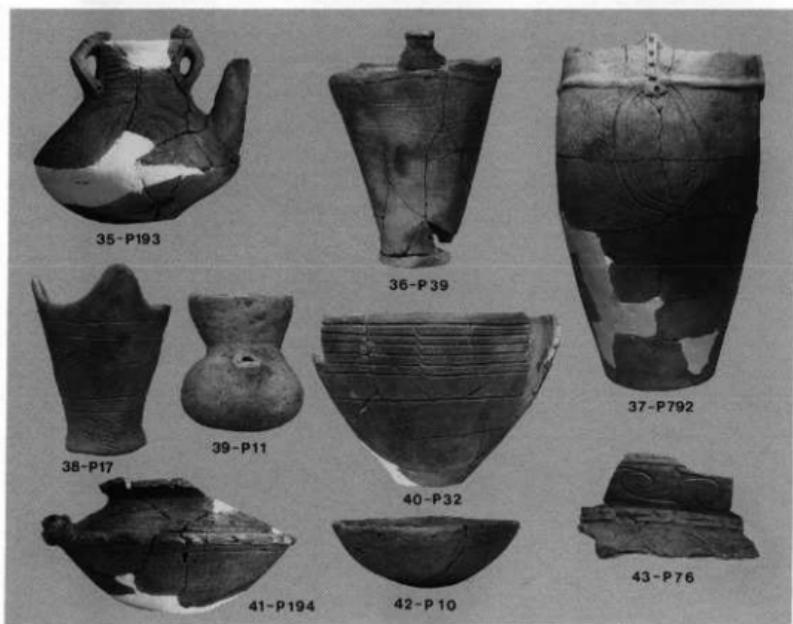


住居跡出土土器(1)

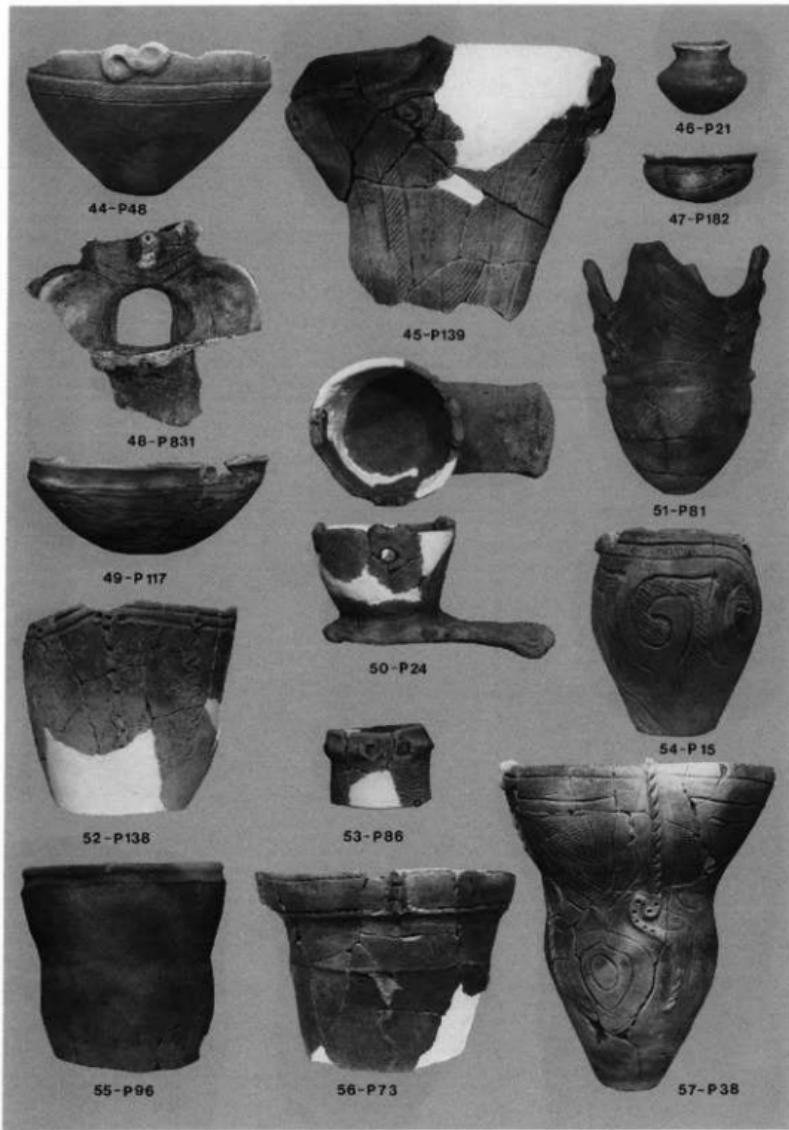
PL54



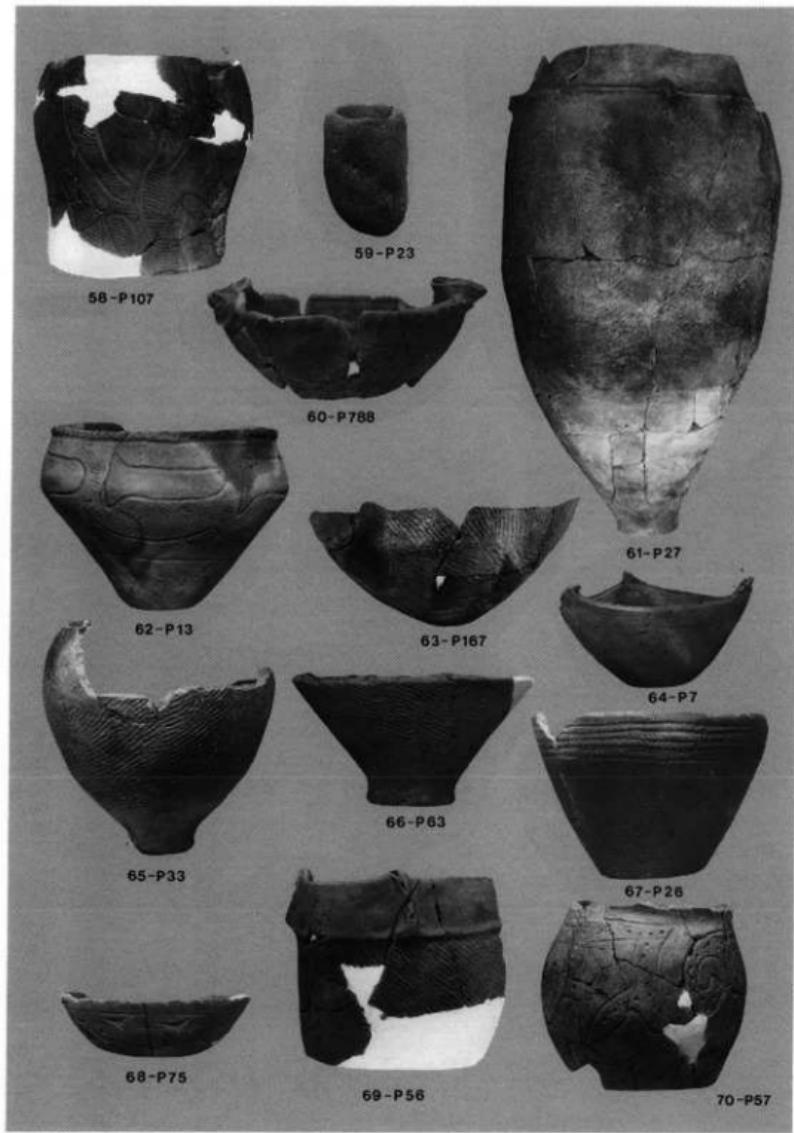
住居跡出土土器(2)



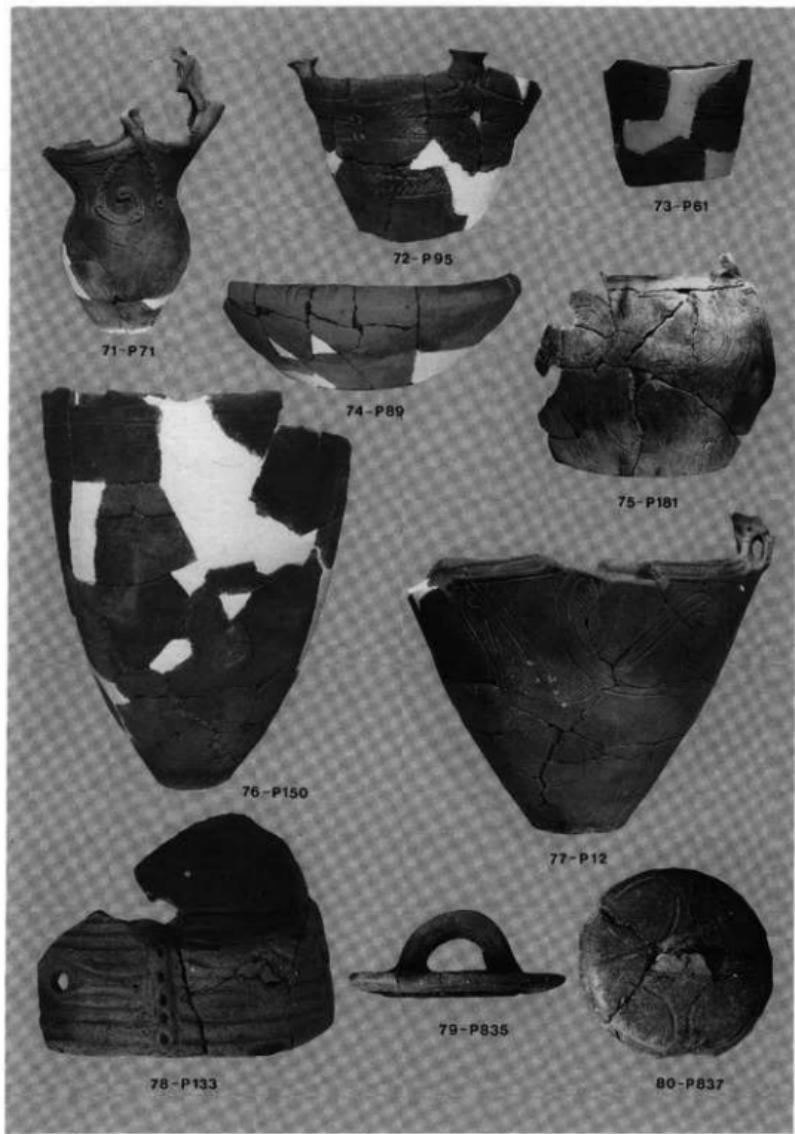
土坑出土土器(1)



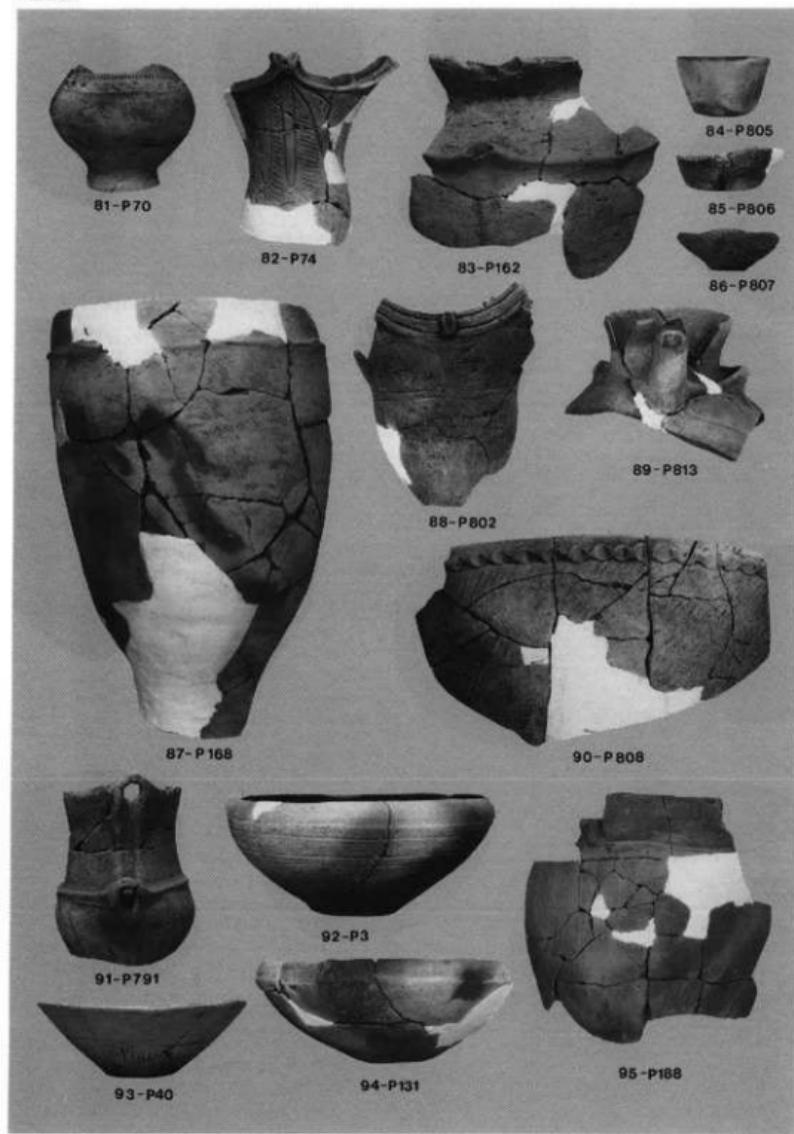
土坑出土土器(2)



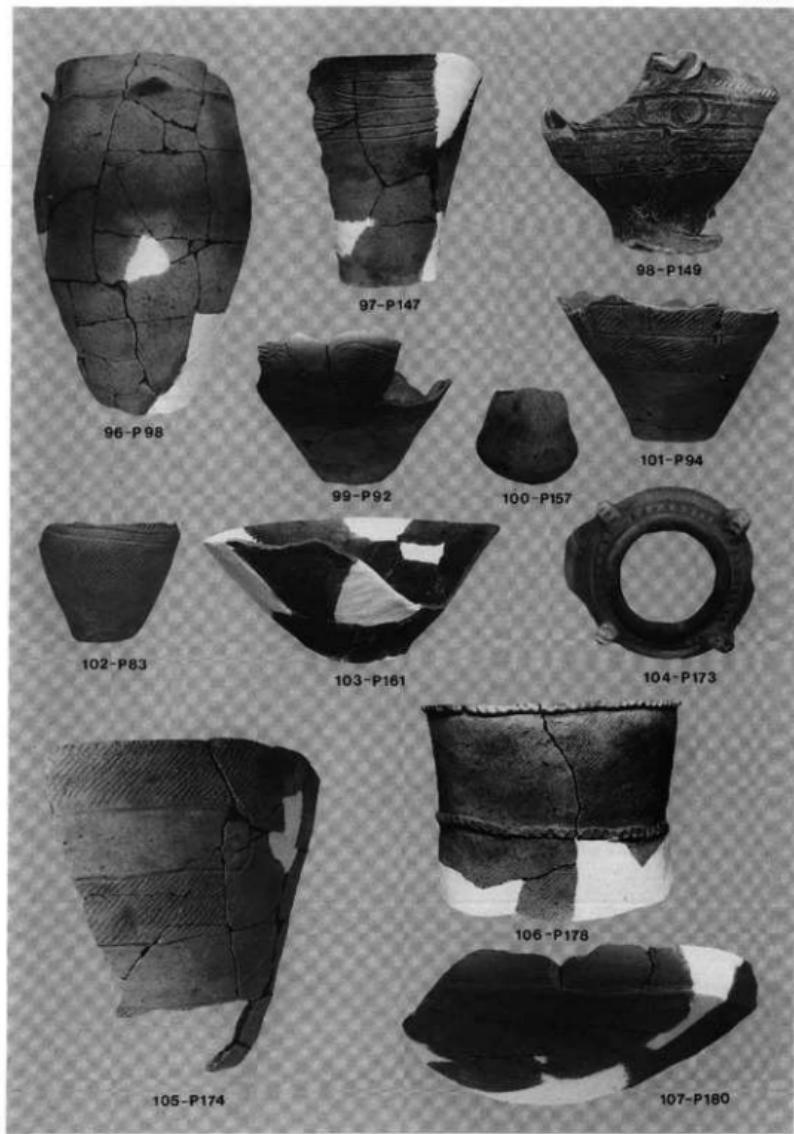
土坑出土土器(3)



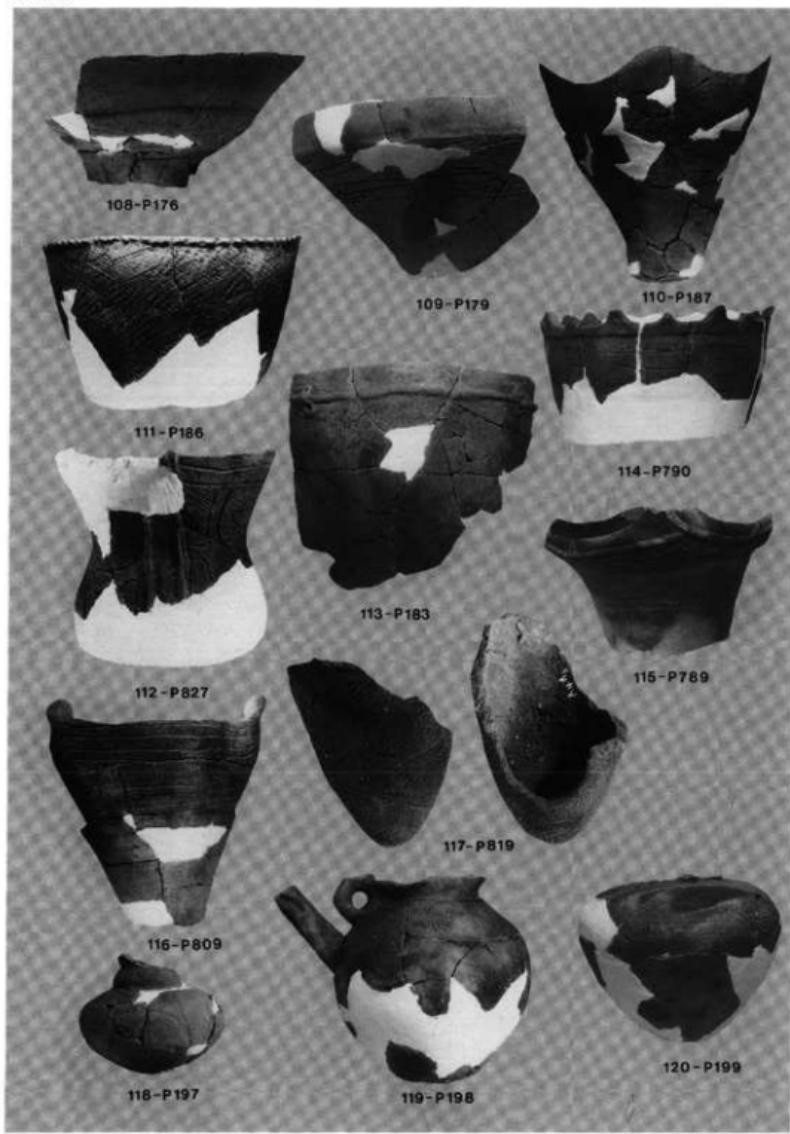
土坑出土土器(4)



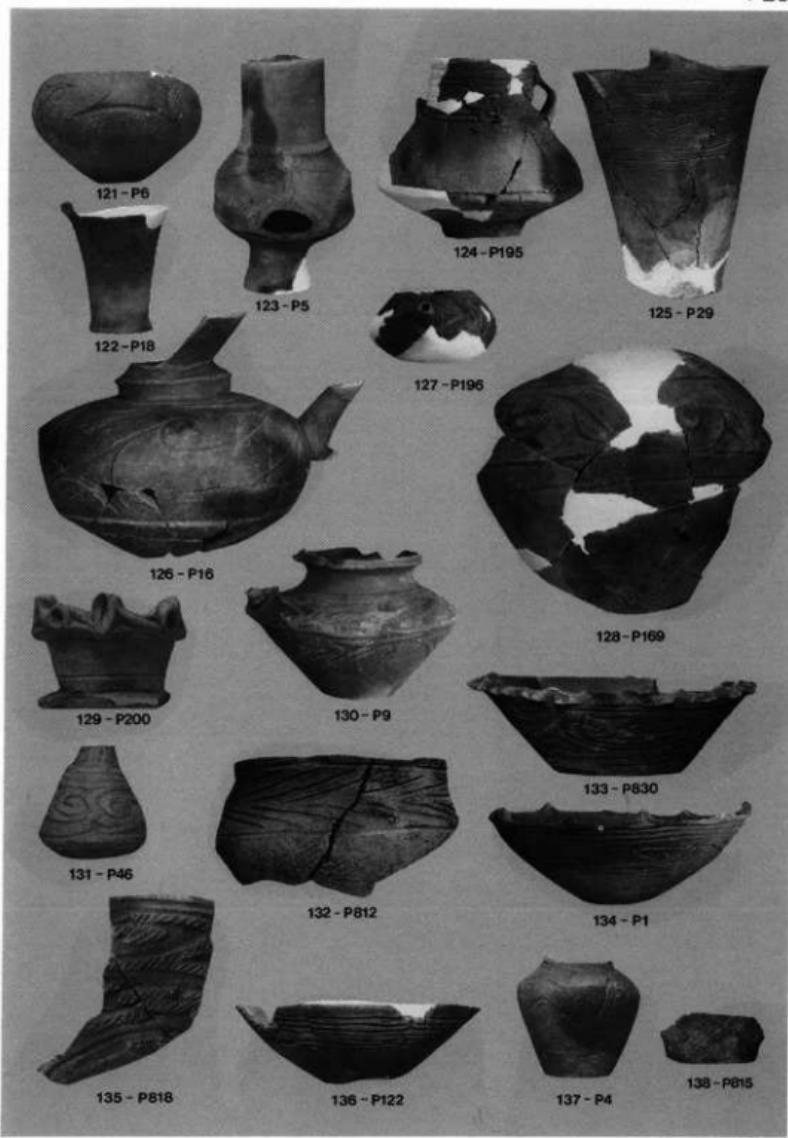
遗物包含层出土土器(1)



造物包含層出土土器(2)



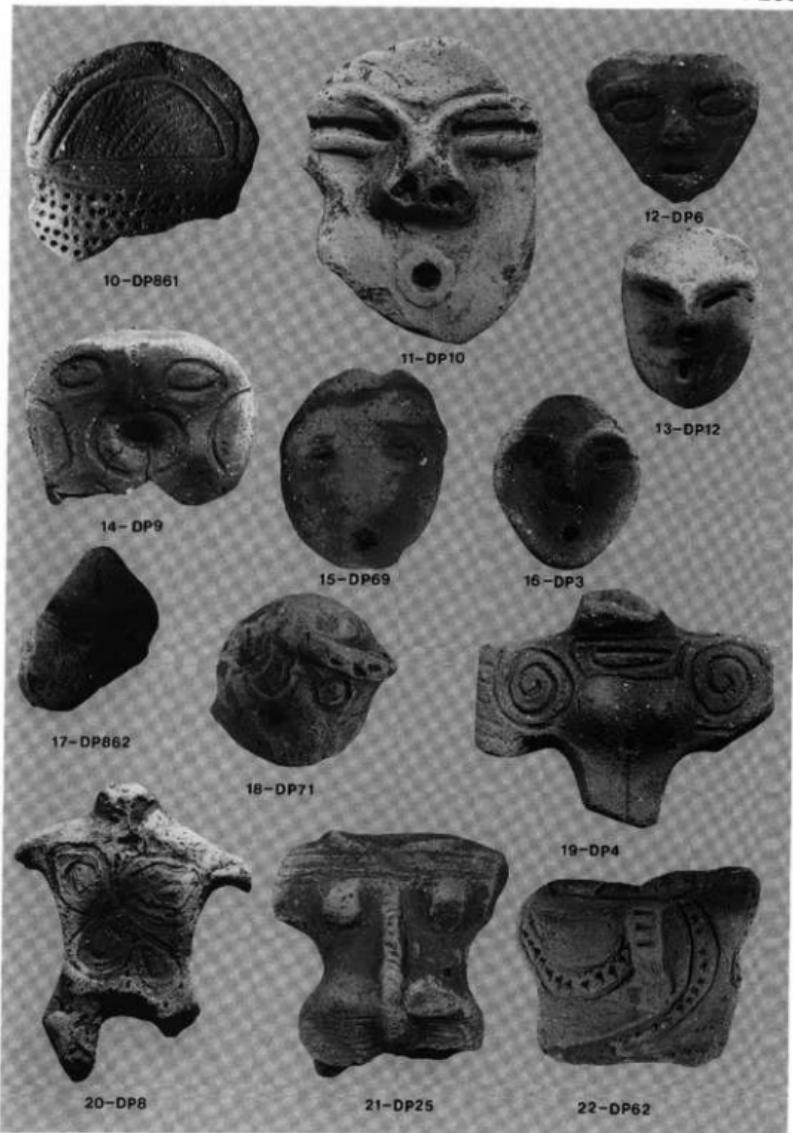
遗物包含层出土土器(3)



遺物包含層出土土器(4)

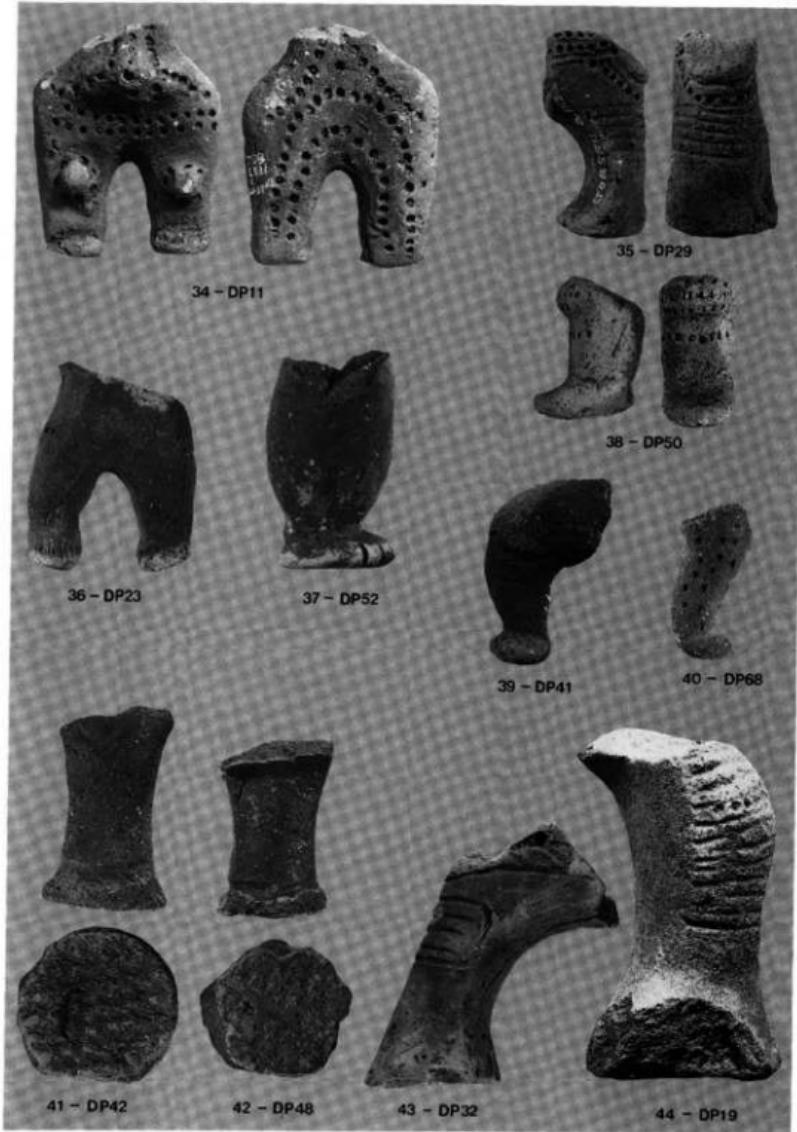


土偶(1)



土偶(2)

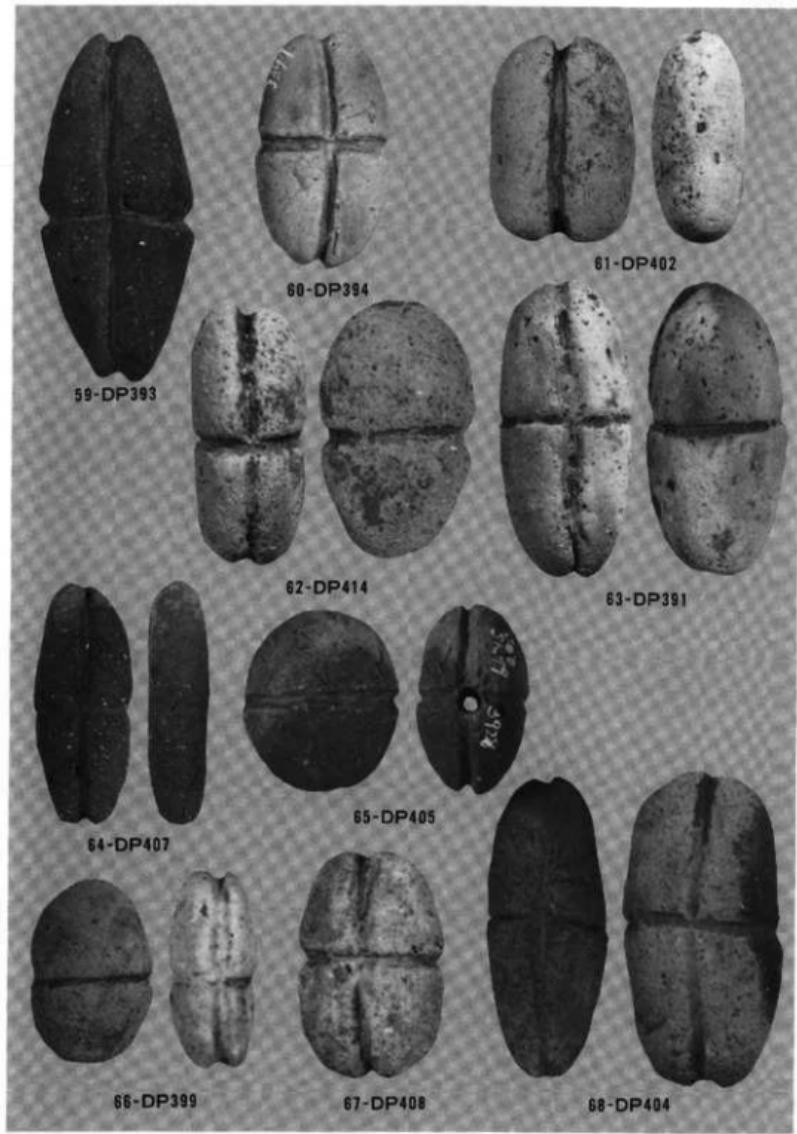




PL66

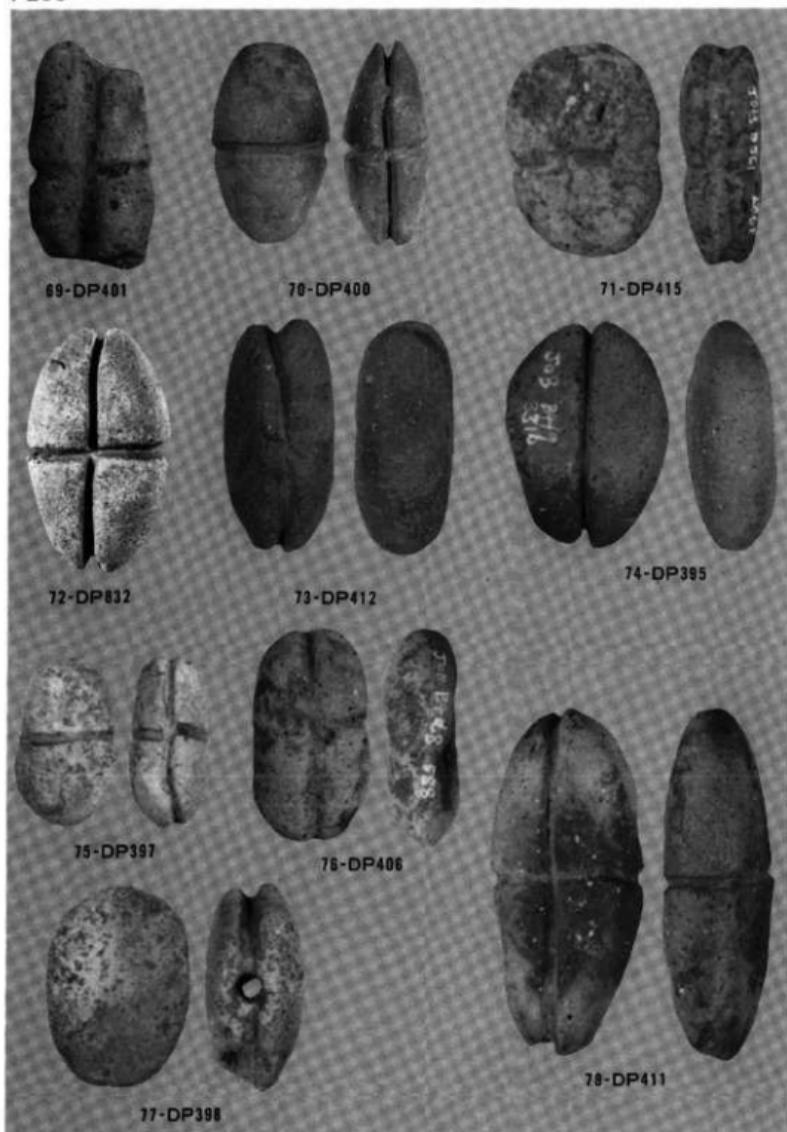


土偶(5)、その他の土製品



土錘(1)

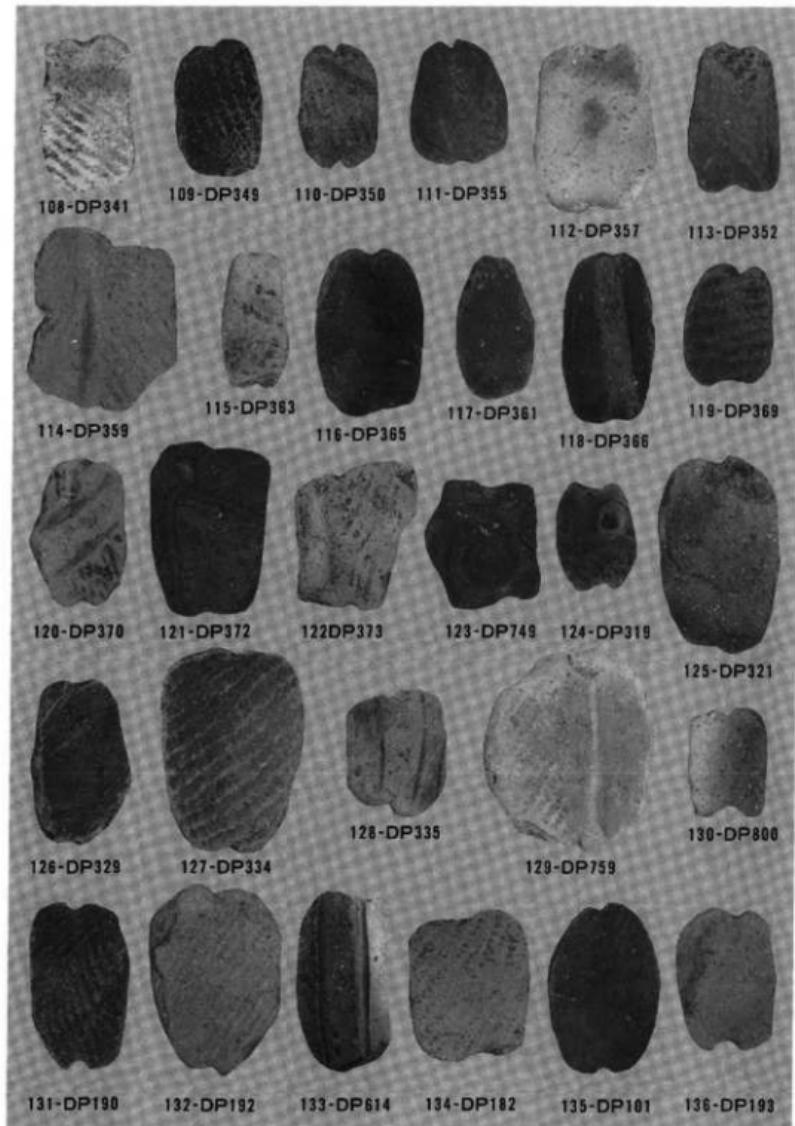
PL68



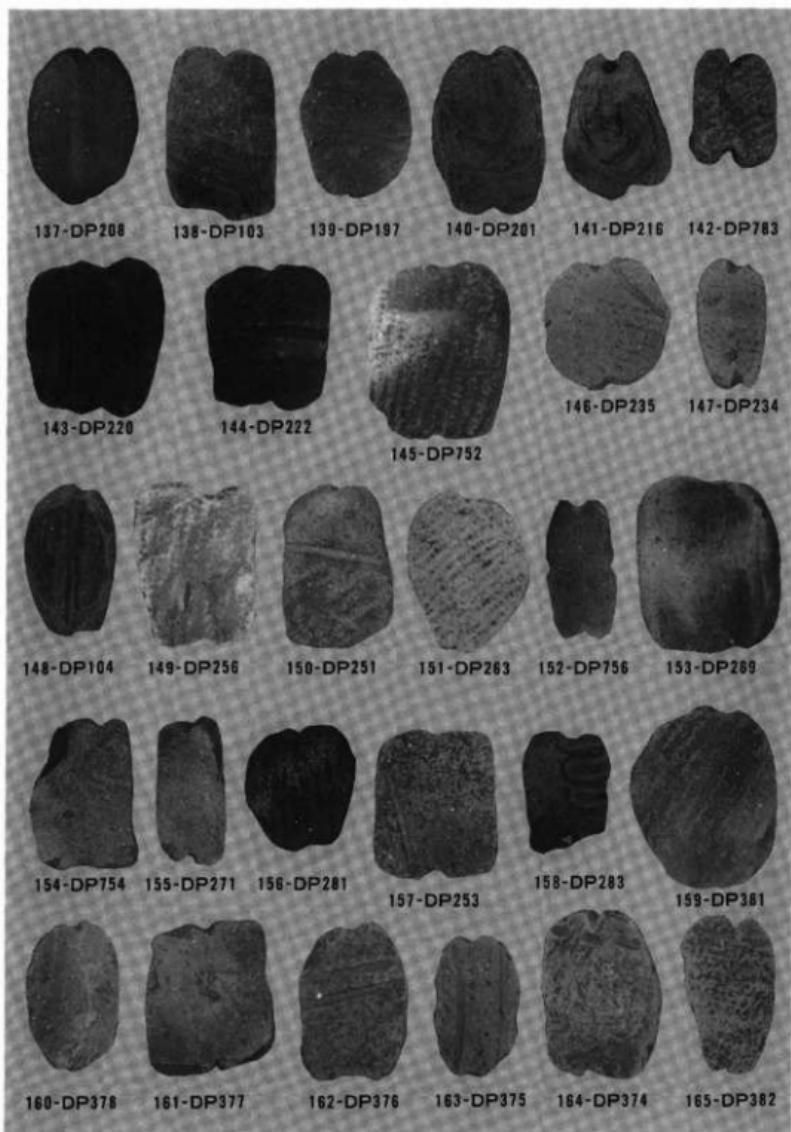
土鍾(2)



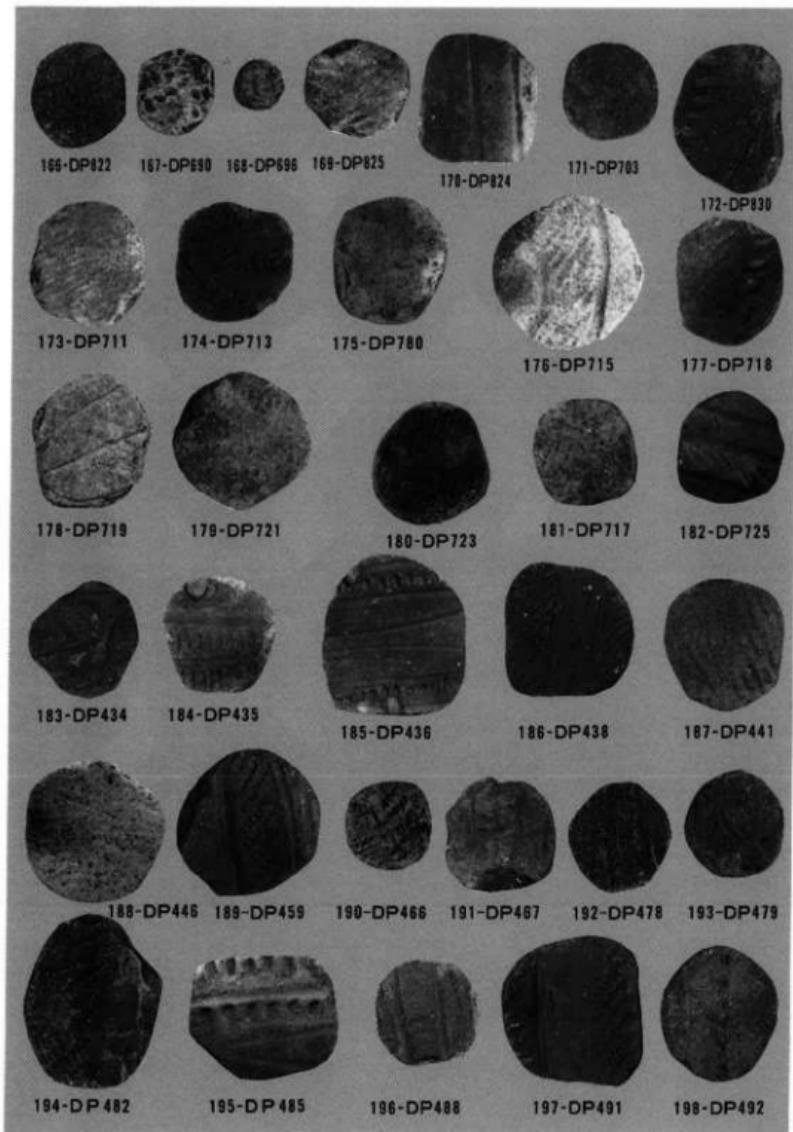
土器片鍤(1)

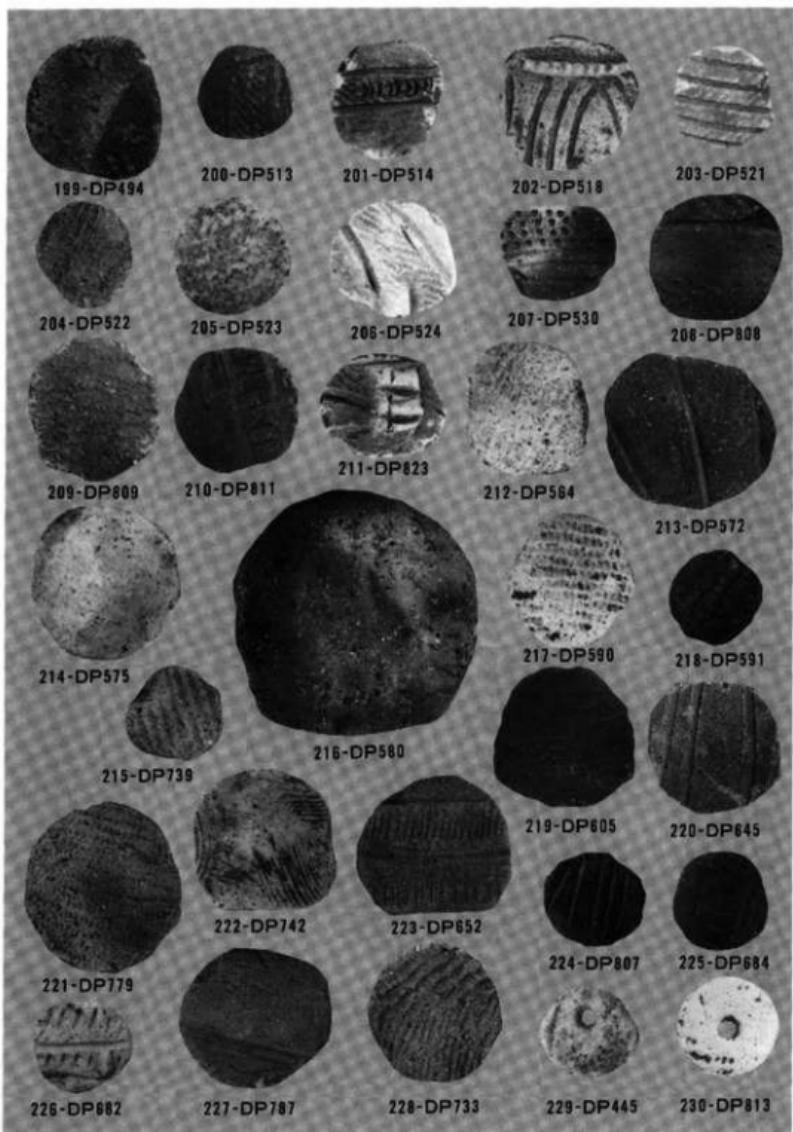


土器片鍤(2)

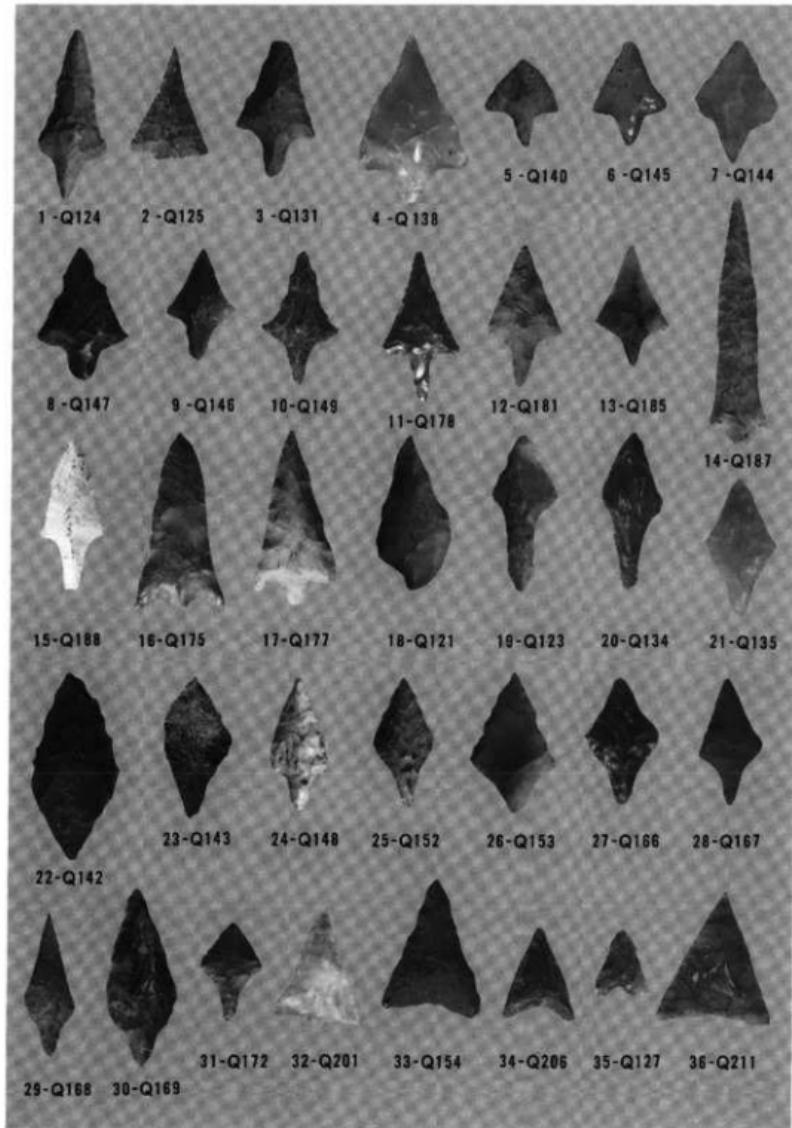


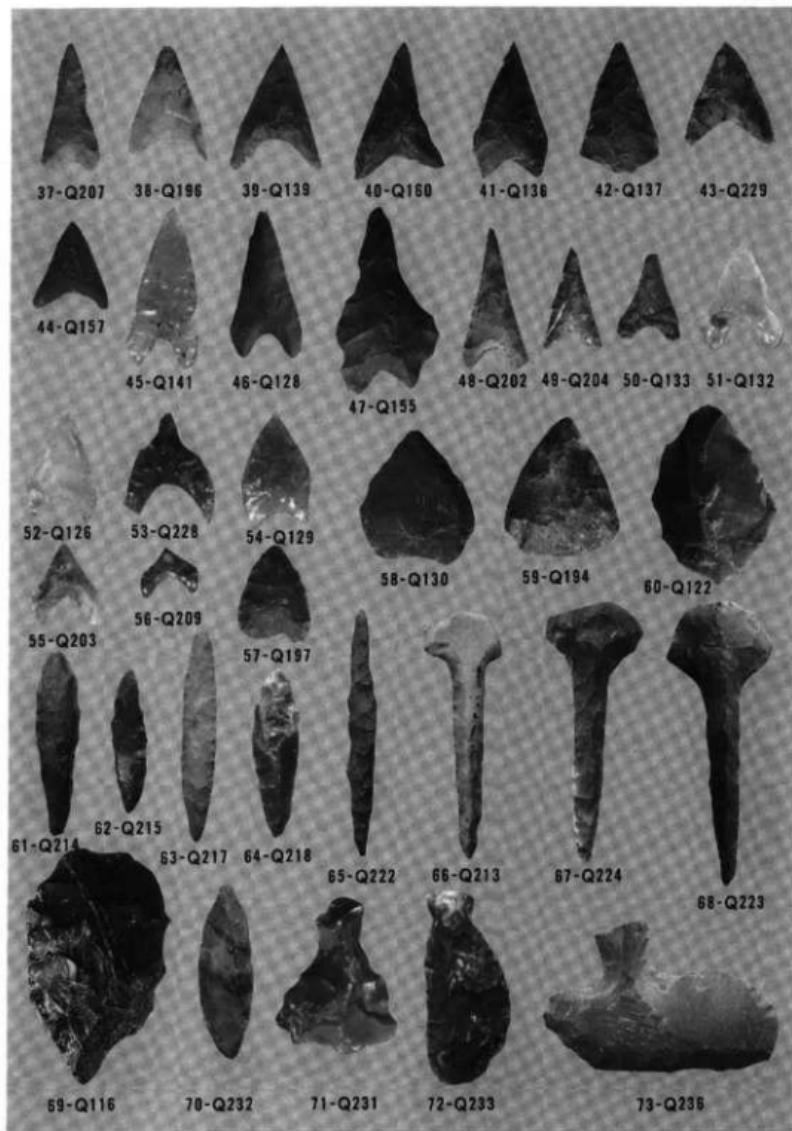
土器片錘(3)



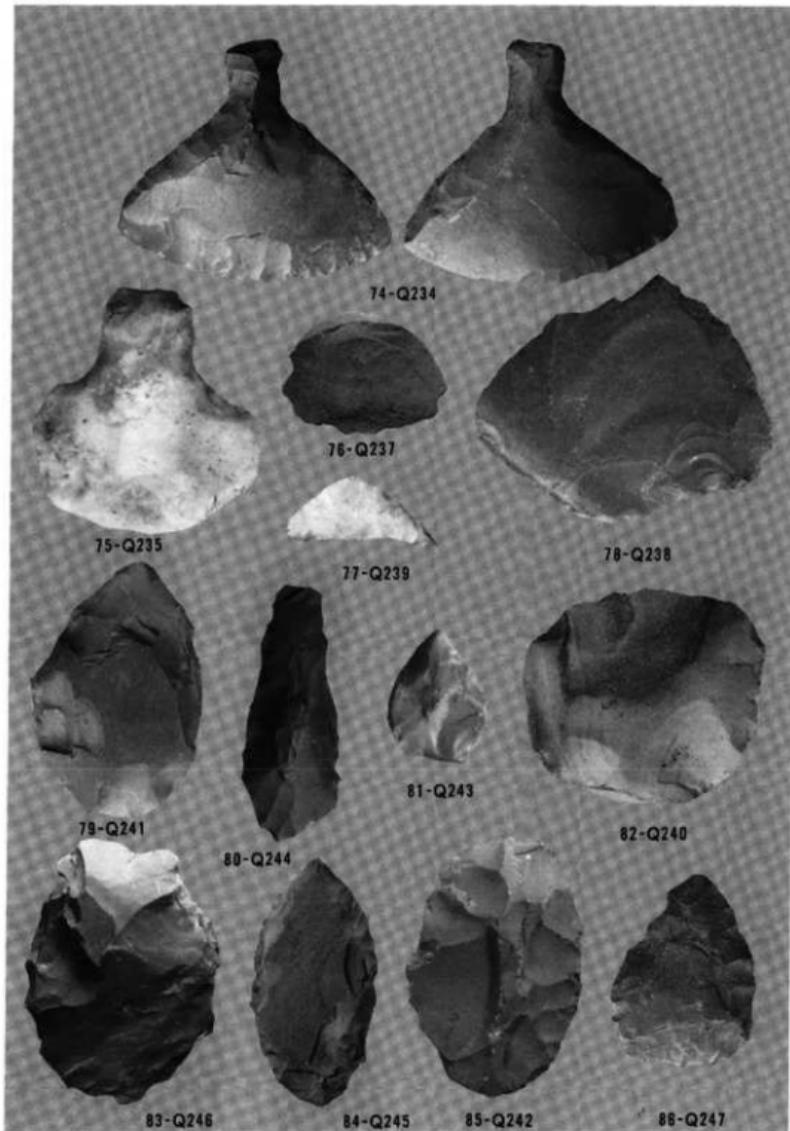


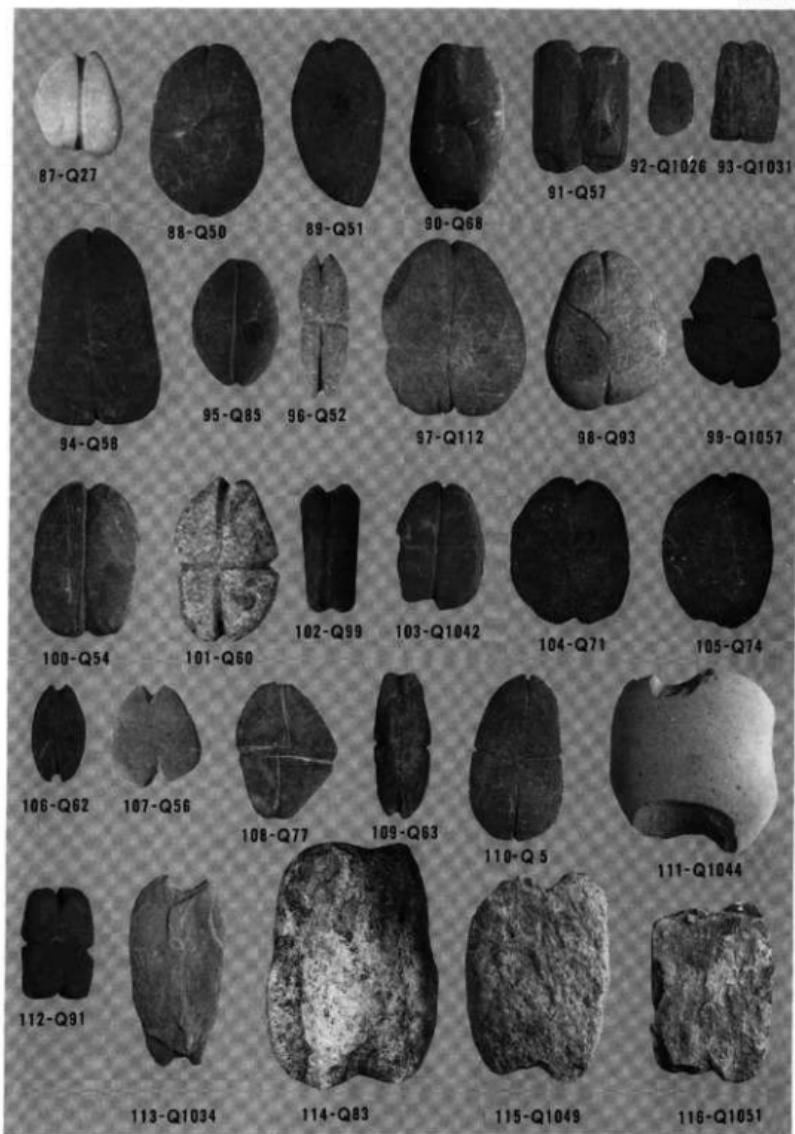
土製円版(2)



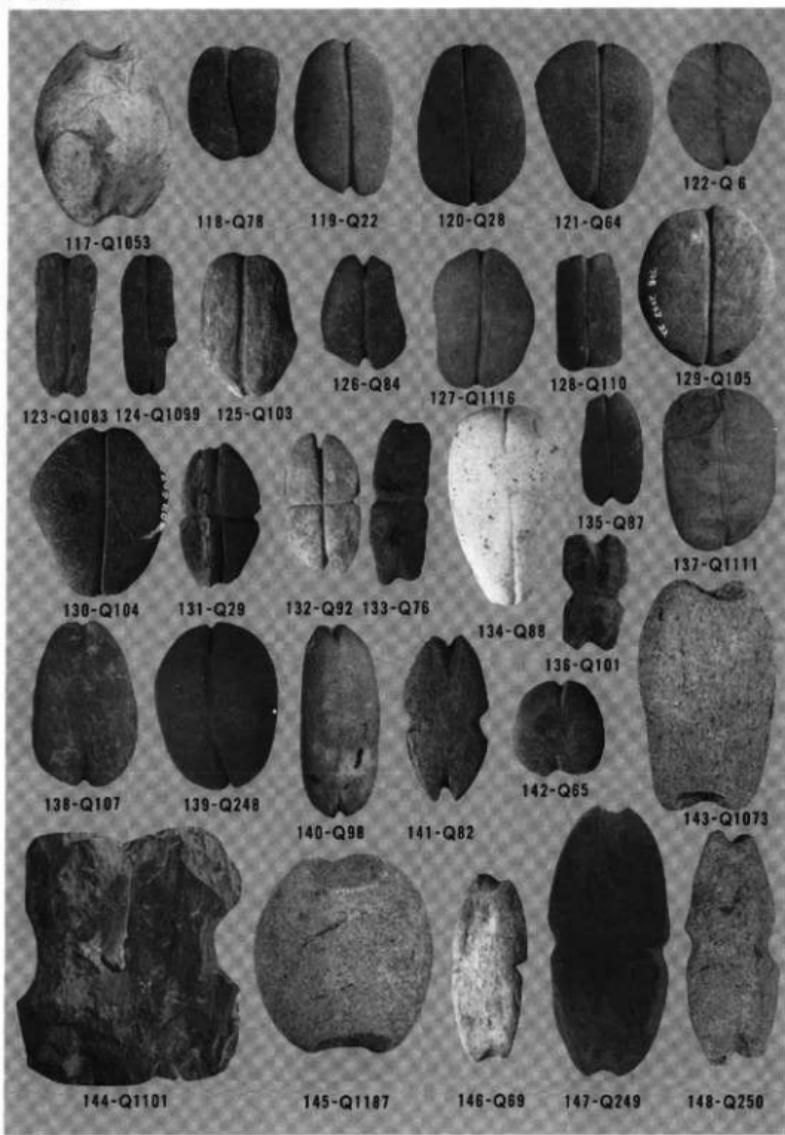


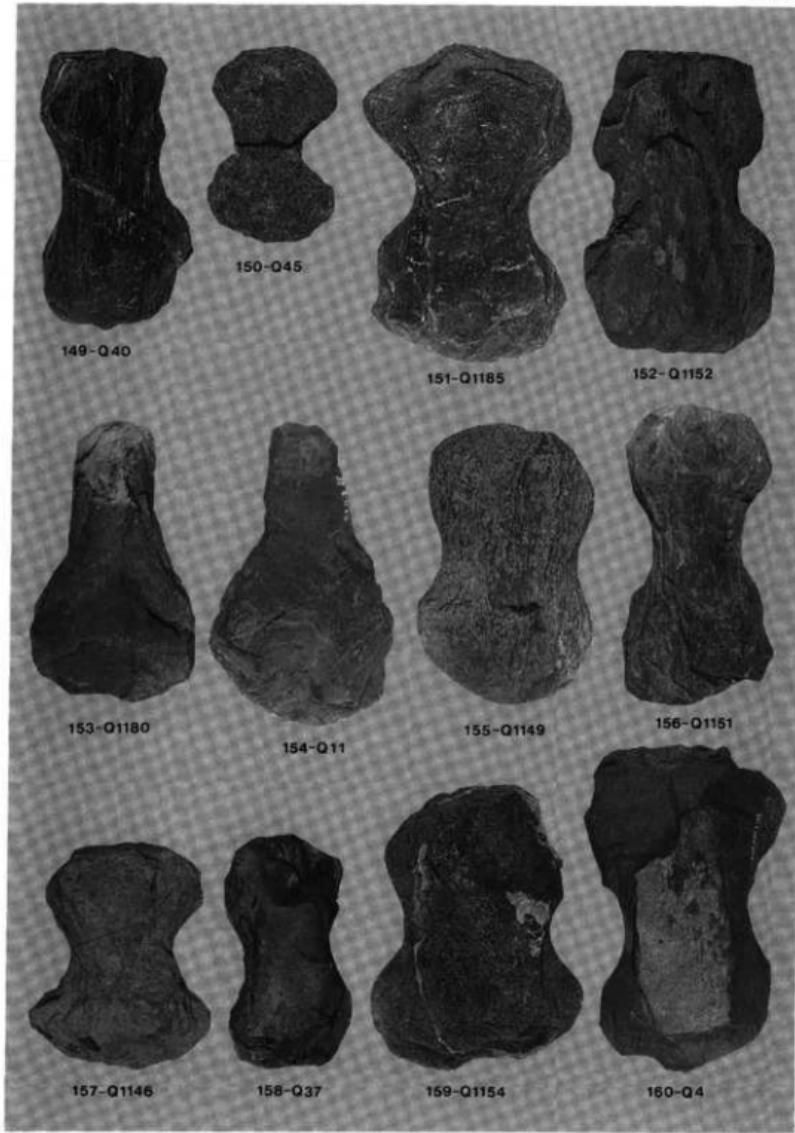
石鏃(2)、石錐



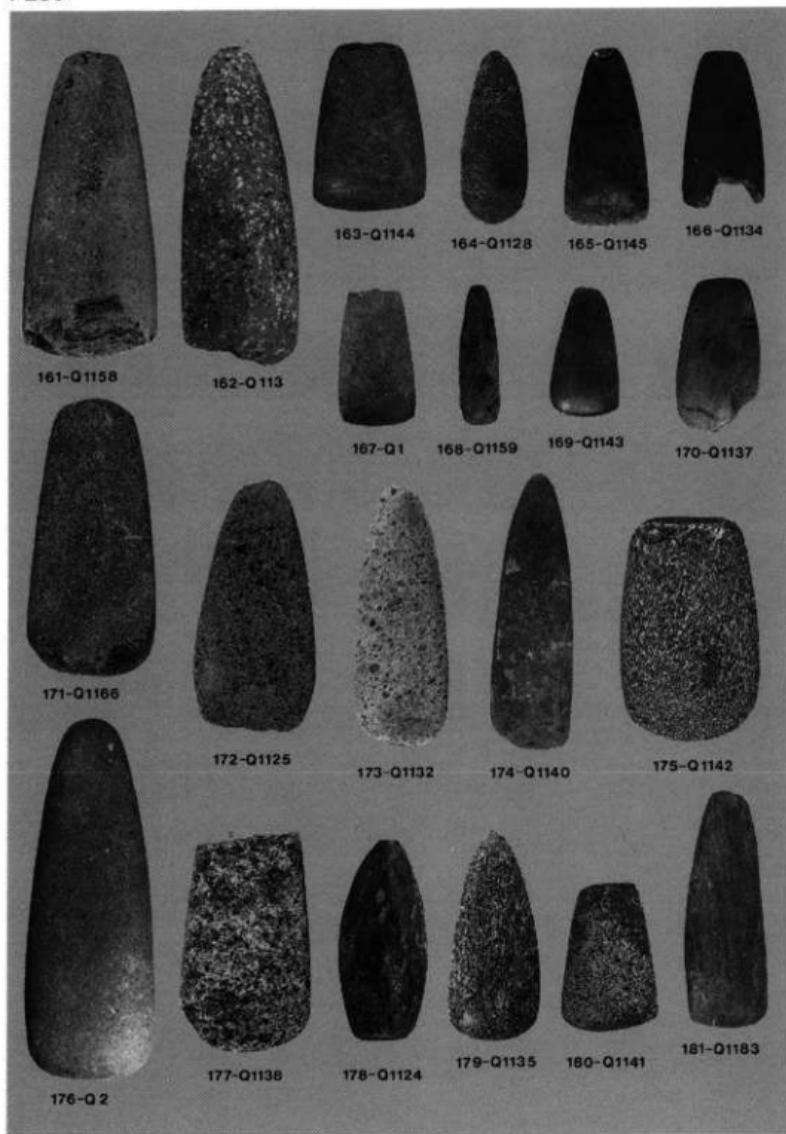


石錘(1)

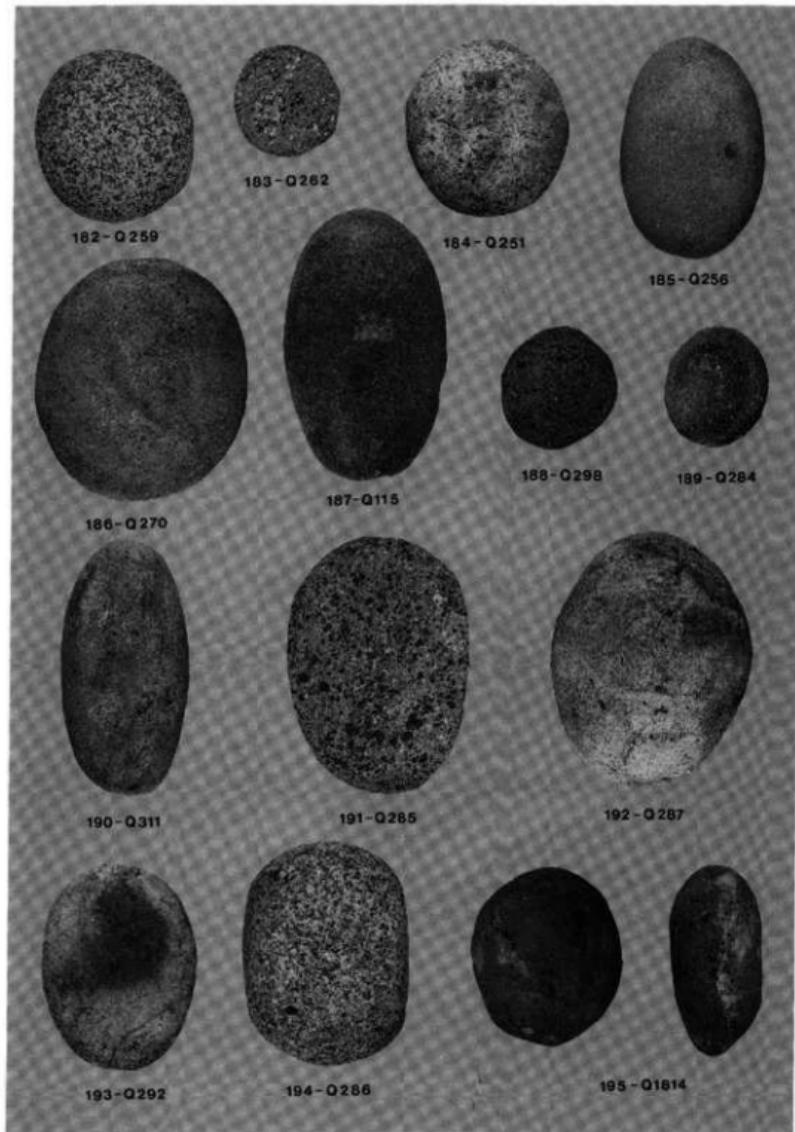




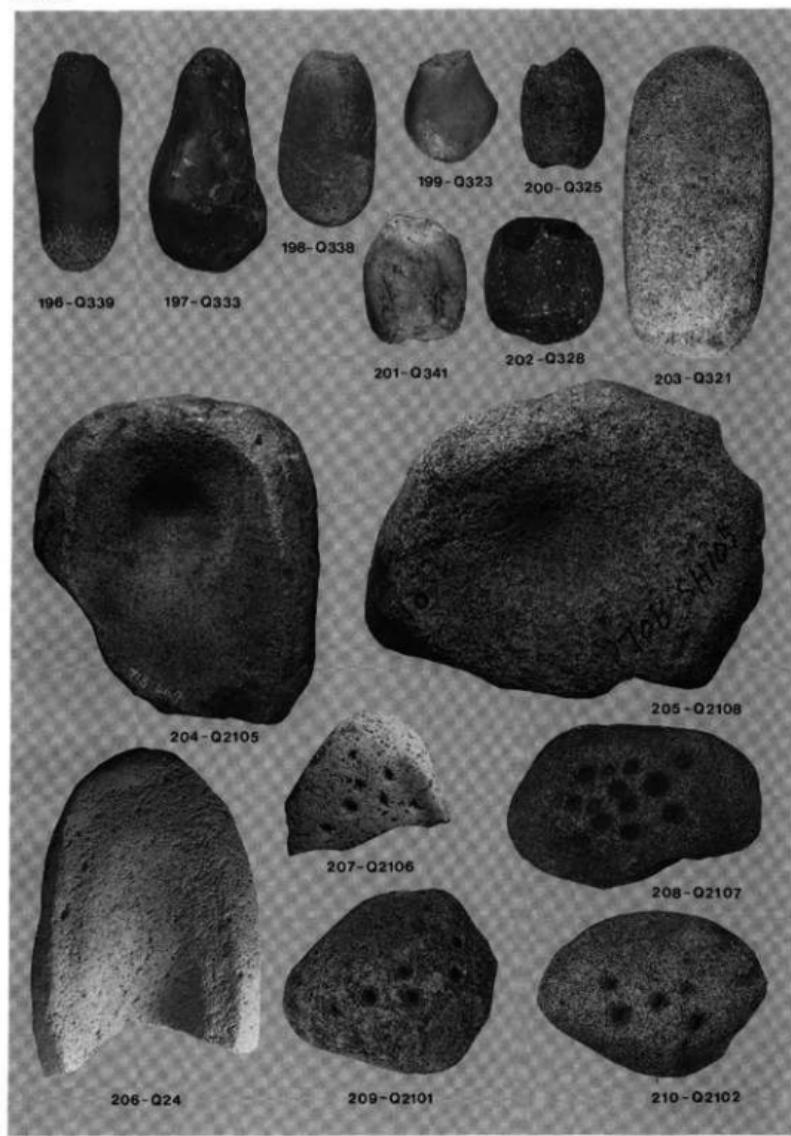
打製石斧



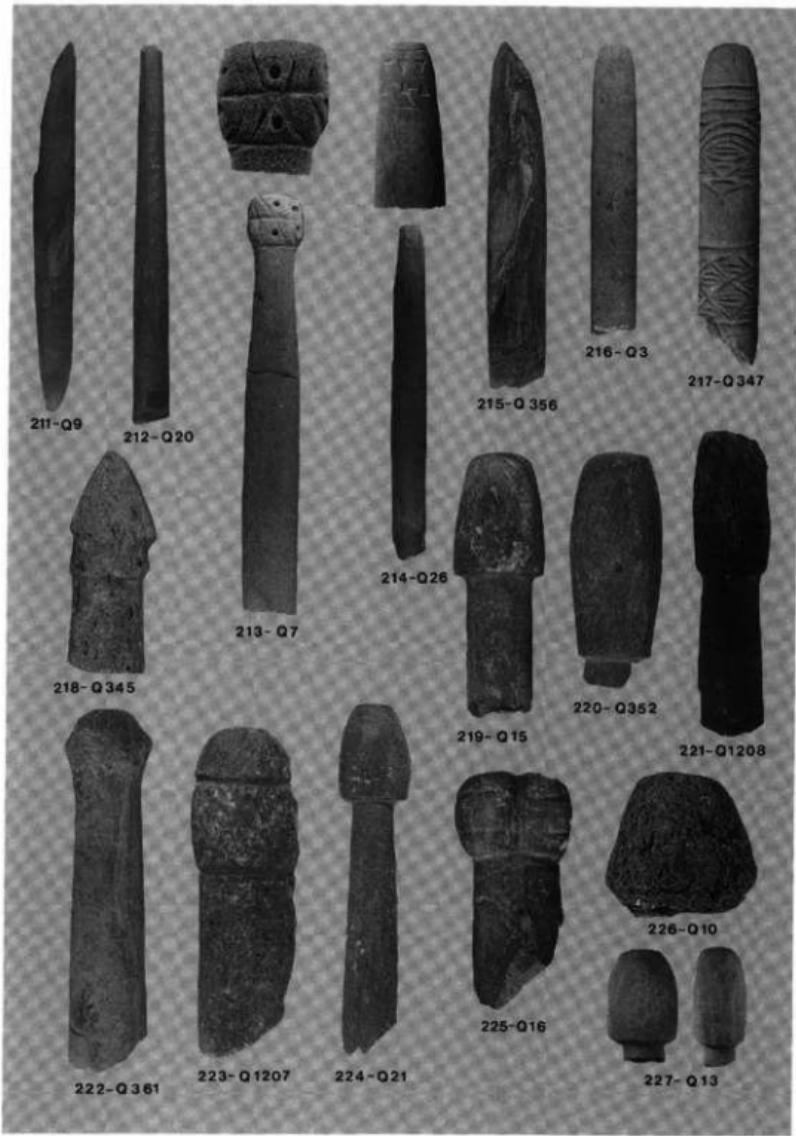
磨製石斧



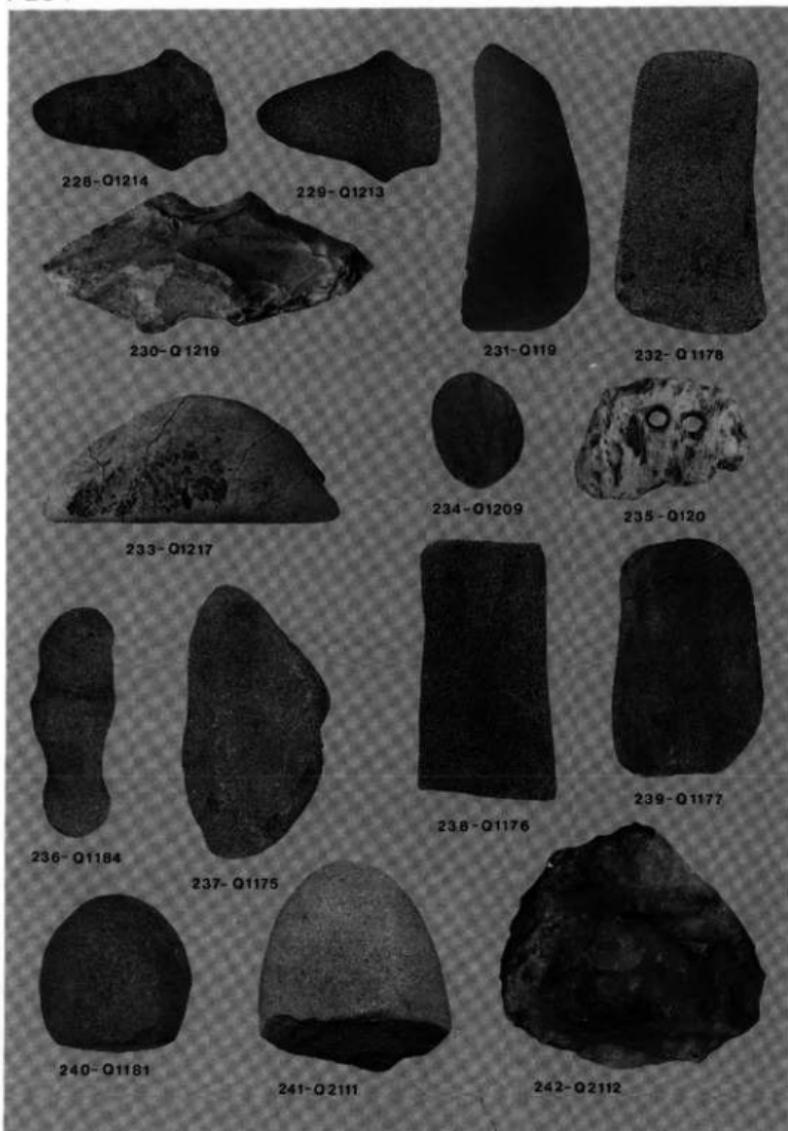
磨石



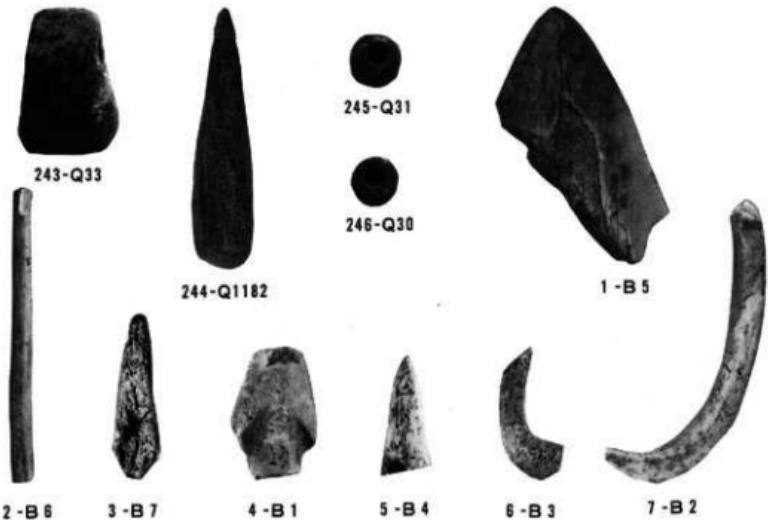
敲石·石皿·凹石



石劍・石棒



その他の石製品



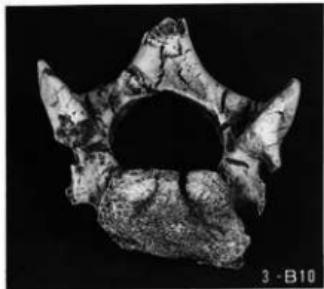
石製品・骨角器



シカの角



焼骨片(1)



イノシシの胸椎



イノシシの胸椎



イノシシの上腕骨



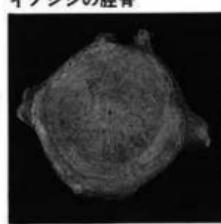
イノシシの胸椎



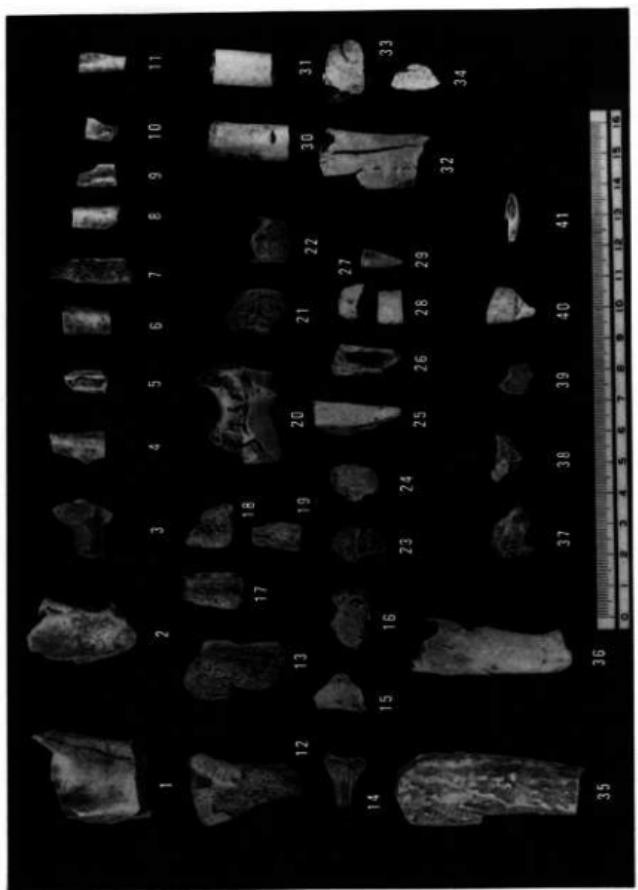
イノシシの脛骨



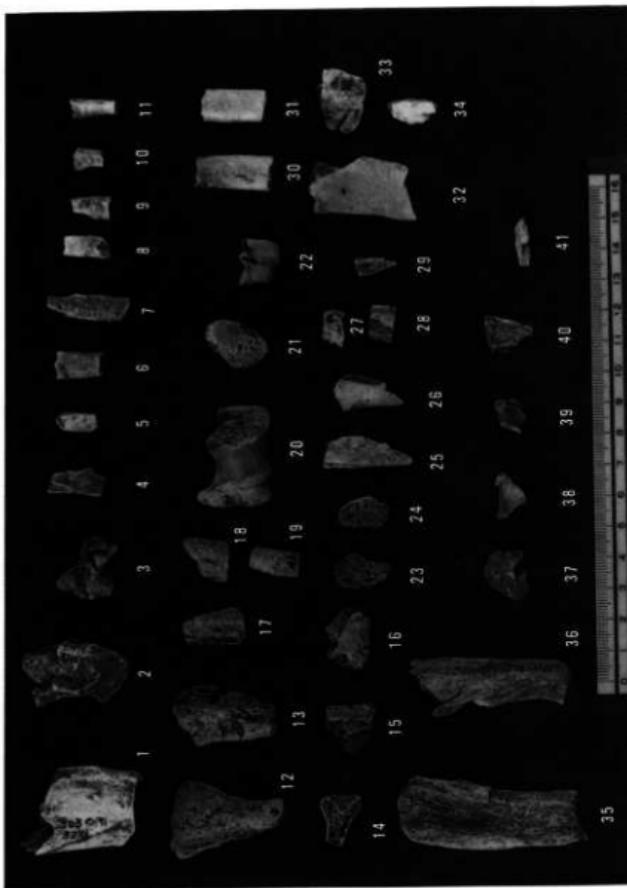
イノシシの脛骨

B4区出土の鹿角片・獣骨片・
焼骨片(2)

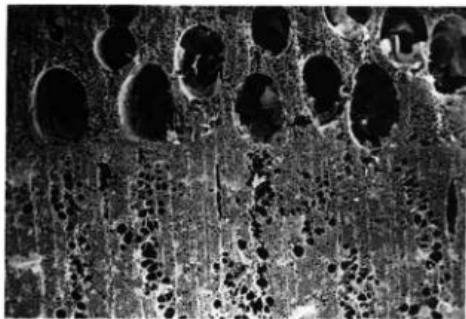
イルカの腰椎



1~11 : SH71
 12~34 : SH141
 35~41 : SK31
 1~2+3+21~22 : イノシシ
 12~16 : ヴミガメ類
 17~20+35 : シカ



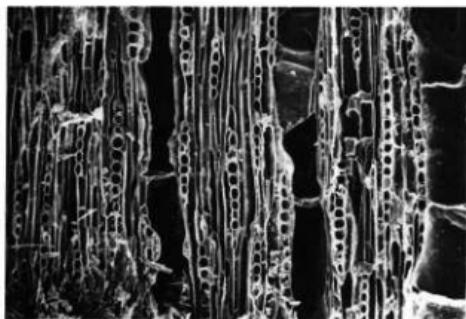
同定烧骨片



木口
 $\times 35$

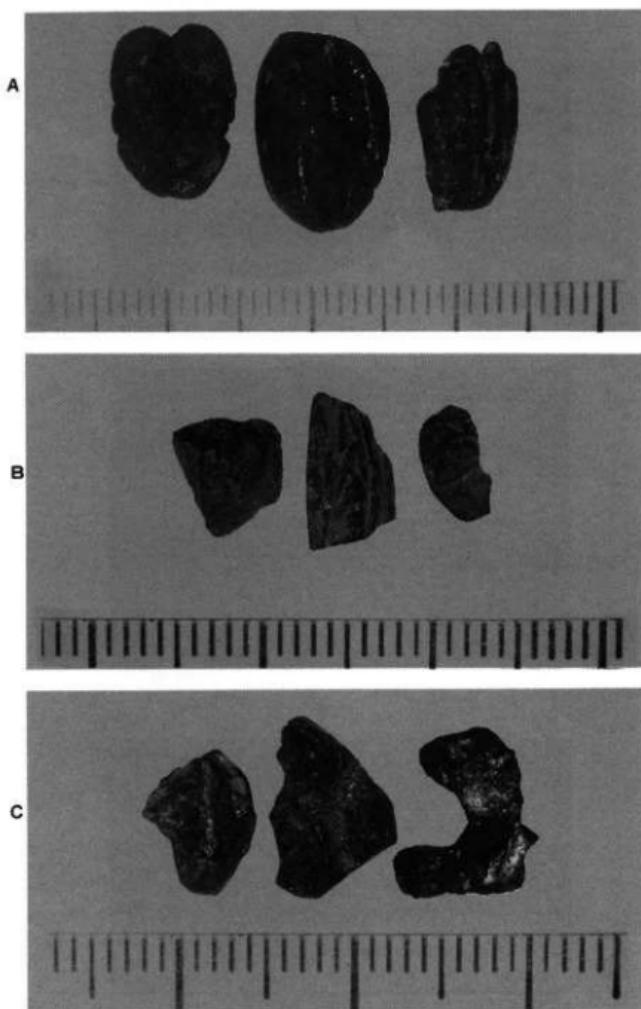


径目
 $\times 140$



板目
 $\times 140$

No 4 *Castanea crenata*



A : *Quercus* sp. No. 2

(スケールはmm)

B : *Castanea crenata* No. 1

C : *Juglans ailanthifolia* No. 2

茨城県教育財團文化財調査報告第35集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 9

小 場 遺 跡

昭和61年 3月24日印刷

昭和61年 3月31日発行

発 行 財團法人 茨城県教育財團

水戸市南町3丁目4番57号

印 刷 株式会社 あけぼの印刷社

水戸市松が丘2 6-24